

俳句雜誌

令和三年十月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十四卷第十号

水明

2021 10月号



《今月のかな女》

三日月に橋を渡りて別れけり

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

この俳句を読むと、三日月と橋とかな女の他には何も存在していないような不思議な感覚にとられる。前方の三日月を眺めながら橋を渡り、そこから方向を右か左に転じたとすれば句の通りになるが、単に三日月から目を逸らしたのかも知れない。「三日月に」の「に」から察すれば、三日月に別れの挨拶をしたいという意味にも受け取れる。

(鬼之介・註)

— 華の一句 —

チーママのラメのスリット星祭

石 田 慶 子

先ず、「チーママ」の言葉の解説から入るが、クラブやスナックの最高責任者である大ママに対する小（チー）さいママの意で、ママのサポート役である。馴染み客を招いての店の星祭。ホステス嬢も加わって思い思いの願い事を短冊に書いて吊る。美人でスタイル満点、頭の切れるチーママの差配でムード最高。客の視線がチーママのラメのスリットに集中する。

（鬼之介・推薦）

水明

令和3年
10月号

華の一句

夢まぼろしの(作品)

滯つくし(近詠)

天球儀(近詠)

風知草 雪欄作家近詠鑑賞

硯箱 季音月評

季音「雪」(同人作品)

季音「月」(同人作品)

季音「花」(同人作品)

『水明誌』を繙く

現代俳句鑑賞

山本鬼之介

由良ゆら女

網野月を

松井由紀子

井口俊晴

矢作水尾 山中みどり ほか

井上燈女 丸山マスマ ほか

近藤徹平 井上玲子 ほか

丹羽真一

網野月を



新同人紹介

夏季競詠

大場順子
大塚茂子
大橋廸代
ほか

夏季競詠作品評

山本鬼之介

水琴窟 (水明集八月号鑑賞)

池田雅夫

山紫集

68

鼓笛集 (同人作品)・私の一句

74

俳誌望見

梅澤佐江

77

句集喝采

近藤徹平

78

水明例会報・各地句会報

79

水明の記事他誌転載

86

インターネット句会のご案内

65

新珠賞作品募集

87

水明塾のお知らせ

88

菊風句会のお知らせ

89

風声・水明発展基金御礼

90

後記

92

題字・長谷川かな女 表紙・内田恵子 カット・福田千春

夢まぼろしの

山本鬼之介

秋めく路地を口三味線の御おつ師し匠よさん

つまべにや肌身離さず守り札

悶絶と気絶のちがひ酔芙蓉

秋扇ひらき「下天の内…」を謡ひけり

九月閑日心身ともに再起動

追はれゆくポルシェの女星流る

担任は八尾小町よ秋夕焼

新米供へ弥栄なれと屋敷神

滯つくし

由良 ゆら女

動かれぬ家居いつまで山椒魚
一雨のありし渡し場夜の秋
初嵐吼えて一夜を身を尽くし
潮入りに背を並べて鯨日和
黎明の河を五彩に鱗雲
古都よりの秋霖抱き大河ゆく
鉄橋を灯一筋天の川

本当に長い間人生の四分の三は大
阪だ。にも拘らず大阪人に成り切れ
ない。しかし今更好き嫌いなど云う
齡ではない。骨を埋める場所も定め
た。ハザードマップによると淀川に
万一のことがあると我家は浸水する
とか。改めて淀川を眺める。滔とう
として立派だ。琵琶湖とこの流れが
なればこの大都市のすべての命と
生活は一刻も成り立たぬ。万一なき
事を祈りつつ、感謝の念で淀の水を
頂き、残暑の中本格的な秋の到来を
待っている。

天球儀

網野月を

星 祀 る だ け で 所 詮 は 他 人 事
も う 二 度 と 心 に 決 め て 星 祭
星 祀 る 媚 薬 と 云 ふ は プ ラ シ ー ボ
視 か れ る こ と 知 り つ つ も 星 祭
ロ ケ ッ ト に 後 ろ 姿 を 星 祭
彼 女 も 彼 も ト ラ ン ス ジ ェ ン ダ ー 星 祭
時 計 し て 眠 る 男 や 星 祭

「天球儀」と題して、星祭の連句を試みてみました。決して成功しているとは思われませんが、いま現在の雑感を鏤めてみました。私の勤め先では、建物の入り口毎に大きな笹竹を飾って、七夕を祝います。勿論、皆が自由に夢や願い事を書き込んだ短冊を枝枝に吊るします。自分が何を夢見ているのか、何を願っているのかを確認する機会になります。年に一度は、愛する人に会いたいですよね。連句中のロケットはLです。で、念のため。

風知草

●季音雪欄作家近詠鑑賞

松井由紀子

◇葉桜（七月号）

菊池ひろこ

曲水の一巡すれば囀れり
葉桜や詩の後半を読み返す
青嵐中間色のままの父母

曲水は雅な春の歌会ですが盃が流れてくるまでに詠む一首はさぞ緊張感を伴うことでしょう。詠み終えて干す盃、はじめて鳥の囀りが聞こえます。詩の後半次第に収斂され研ぎ澄まされる詩人の言葉に深く感動を呼び起こされて読返さずにはいられないのです。中間色は一見無難曖昧ですがその滋味の深さ暖かさはとても繊細で美しい。瑞々しい初夏の風を配されて穏やかで優しいご両親の微笑がストツプモーションでくつきりと。

夏至の夜の禿山フェイス・シールドら
夏近しバベルの塔へ外階段

コロナ災禍の緊急事態宣言などものは、歌い踊る若者一群フェイスシールドの異相はムソルグスキの「禿山の一夜」に出現する魔女の乱舞のよう「ら」に非難の思いを込めて。

際限のない人間の欲望、建設が加速するバベルの塔そこに生きる私達、ならば爽やかな初夏にはせめてゆつたりと外階段を昇りましょうか。たといそれが振出しに戻ってしまうトリックアートだとしても。

◇落し文（七月号）

鈴木康世

海芋白し花の奥なる翅の音
石楠花やしきりに動く手話の指
葉桜や細身となりし円空仏

清楚な筒形の花の奥から微かな翅音、香気に惹かれた小さな虫の恋のトレモロでしょう。淡彩の薄葉を重ねたような石楠花の蔭にひらひらとしなやかに指は動いて話し手の笑顔も見えるようです。見沼の薬王寺には薬師三尊像や十二神将ほか多数の円空仏が蔵されており申込んで拝観することが出来ます。口角のあがった豊頬の笑顔と素朴な太り肉の体軀が温かく親しい。葉桜の頃の清しさは俗にあって俗ならざるみ仏達を清らにスリムに印象づけるのでしょう。

踏み惑ふ杖のその先青芒

お喋りは暫しお休み落し文

猛々しく生い茂る青芒分け入るには手強い相手です。抗うのは止めましょう、ここまで歩いたのですから。柔らかな諦念が不思議な明るさのなかに感じられます。そして虫達のなんと巧みな造形「落し文」。昆虫はみな畏敬すべきアーティストだと思ふのです。

◇梅雨晴間（八月号）

石山かつ子

あぢさみの藍濃き波を二の鳥居
御手洗は磴の途中に青葉風
夏鶯に励まされつつ磴のぼる
森の香と茅の輪の匂ひくぐりけり
産衣の嬰まあるく抱いて涼しかり
梅雨晴や 関東平野一望に

「梅雨晴間」一連のお句に作者のこの日が駒落しで描き出されています。藍濃きあぢさみを賞でつつ二の鳥居をくぐればそこは神域、石段の途中に澄んだ御手洗があり青葉を吹き抜ける風に一息です。夏鶯の聞けて冴えた囀りを聞き千段を昇りつめれば玉の汗。雨上りの社の森の香り新しい茅の輪の草の匂い。嬰を大切に抱えておられるのはお宮参りをされたのでしょうか。そして一望の関東平野、嬰の未来も明るく晴

れやかに拡がります。佳き一日を同行させて頂きました。

◇平林寺（八月号）

境 延昭

街騒を逃れて寺の苔の花
どくだみの蜂起するかに雑木林
読経の途切れとぎれに青葉闇

平林寺のある野火止、新座一带は落葉樹の多い里山のゆるやかな起伏とあちこちに残された雑木林が武蔵野の面影を留めている地域です。平林寺は観光地化を拒み修行僧の道場としての風格を保つ古刹。苔の花の清しさにびったり。広大な寺域の半ばは自然林真白などくだみの花が地を掩い独特の匂いが満ちれば、すわ大事出来！ともなりましよう。風が運ぶ読経の声今は青い目の修行僧も居られますとか。

いかめしき廟の石塔夏の蝶
青葉風梢をわたる鳥の声

松平家の霊廟を中心に数多の墓所燈籠のある静謐な一郭。夏の蝶はここを懐かしむ往時の佳人の幻なのでしょうか。ひと気もまばらな初秋の日私も風の音と鳥の声を求めて平林寺を再訪したいと思いました。

硯箱

◆季音八月

井口俊晴

あぢさるや柾目の細き母の下駄

山中みどり

あじさいの花と一緒に雨の季節がやって来た。傘をさし、家の前を通る人の足元を見てみると、決まって思うのは、母親が大事にしている柾目の細く通った下駄のことである。きれいで真っ直ぐな木目が、齒までしっかり入っていて、高価なことが一目で分かる。きっと会津の桐を使っているのだろう。東京の下町育ちの母は、気風が良くて、間違っても靴なんて履かない人なのだから。

短夜や寝息うかがふナースの灯

由良ゆら女

ちよつと体調を崩して入院することになってしまった。消灯が早い病院の夜は一人で心細い。それでも、いつの間にか寝てしまったようで、カーテン越しに短い夜があげていくのが分かる。その時、ベットの頭の方で、懐中電灯を持った看護婦さんが入って来る気配がした。患者の具合が悪くなつて

いないか、薄暗い病室を回り、寝息をうかがっているのだろう。ナイチンゲールの昔からの変わらぬ献身、ただただ頭が下がる思いである。

含む口おばこの顔もさくらんぼ

吉住光弥

果物の中で、さくらんぼほど小さくて、可愛くて、美味しいものは見たことがない。アメリカカンチエリーとか、外国産もいろいろあるが、何と言っても「佐藤錦」で知られる山形が一番ではないだろうか。丸く甘い実をそつと口に含み、ちよつと唇をとんがらせるようにして食べる少女。とっても愛らしく、まるでさくらんぼのようだ。

国生みの島に片足虹立てり

森本早苗

古事記の国生み神話を読むと、伊邪那岐命と伊邪那美命によって生まれたのが淡路島である。あくまで神話の世界なのだが、そうした縁で、淡路島には二柱の神を祀る淡路一宮・

伊弉諾神宮がある。私も八年前に家内と愛犬を連れて参拝し、御朱印を戴いた。逆巻く渦潮の轟が聞こえる中、一方は淡路島、もう片方は鳴門の海を踏んづけ、虹が七色に立ち昇っている。雄大な景色である。

道よぎる毛虫のスピードいとほしむ

霜中冬至

毛虫は嫌われ者である。春先に卵から孵って、木々の若芽をモリモリ食べて逞しく成長する。彼らはこれから蛹になり、蝶となるために、気に入った木の枝や葉っぱを求め、マイホーム探しに歩き回らねばならない。そのためには、人やクルマが行き交う危険な道を渡ることさえある。そんな一匹の毛虫の命がけの道路横断。「こいつ、けっこう足が速いじゃないか」と、作者の優しい眼が追っている。

青尽くすあぢさる多に古都の寺

梅澤佐江

あじさいの季節である。はじめ白かった花の色は、今や海のような青一色に染まっている。旅行代理店は「梅雨を彩るあじさい」とか「みんなで紫陽花めぐり」などと、観光客の獲得に余念がない。とりわけ京都や奈良の寺にはあじさいの名所が多い。作者が訪れたのは宇治の三室戸寺だろうか、それとも木津川の岩船寺だろうか、いやいや、私ที่ไม่知らない隠

れた名所がもつとあるはず……。煩わしい日常を離れ、花に埋もれて休む作者である。

剥き出しの上昇志向夏の草

宮崎チアキ

暑くなると、家の狭い庭はたちまち草ぼうぼうになる。雨が降った後など、ただ上に伸びるだけでなく、草全体が太く逞しくなるような気がするほど。誰にはばかることなく、剥き出しの「上昇志向」で伸びていく植物たち。ひるがえって人間の社会では、高度経済成長の時代ならともかく、上昇志向なんて言ったら恰好が悪い、ださいと嫌われてしまうだろう。作者はそんな夏の草たちの様子を、ほれほれと見とれているのである。

尺蠖の前屈上手伸び上手

石川理恵

尺取虫を詠んだ句は初めてである。白状すると、私は「蠖」の字が読めなかった。それでも、尺取虫のことだろうかと、すぐ想像がついた。漢和辞典だと「せきかく」と読むそうだが「尺蠖之屈以求信也」（尺取虫の屈むのは、後で伸びようとするためである）という言葉があり、成功するためには、忍耐が必要だとの例えだ。句にあるように、前屈上手は伸び上手なのである。いやあ勉強になりました。

季音雪



法師蟬 矢作水尾

纜の張り見る漁師初嵐
 秋めくやフォークダンスの手のぬくみ
 一塔の暮るる山影法師蟬
 白粉の花や素朴に生きて来し
 職退けば都心は遠しはや晩夏

初 秋 山中みどり

甕覗きの揃ひ鉢巻秋祭
 担がれぬ神輿の無聊疫の風
 降り止んで捨て台詞ひとつ秋の雷
 丁度良き二人の歩調秋の虹
 饒舌な海猫初秋をすみだ川

風むらさき

柚木治子

声の厚み

吉住光弥

朝顔や幸せさぐる蔓の先
朝顔に逢へるときめき雨戸繰る
振り塩の魔法をかけて鮎焼けり
桔梗濃し風むらさきの門跡寺
桔梗の横顔ほのか無言館

蝸の鳴き声厚みかさねたる
突如止む蝸に開くあの世の鍵
雑金魚と生れて素性の怨めしく
父贈る心病む娘に蘭鑄を
含ませたき死水も無しかのヒロシマ

新

秋

由良 ゆら女

秋

隣

網野月を

味噌の香に味蓄を醒ます今朝の秋
ピアソラや情熱の彩花カンナ
盆棚や果実は酒のにほひして
魂送り己は見えぬ己の背
ラ・フランス泪の形にグレコ逝く

病葉や一位の葉には骨がある
夏の寺画鋏の余る掲示板
天の川ほとりに鳥や獣たち
捨鐘はいつも三つよ秋めきぬ
吾が庭の朝日隠れの秋めけり

見知らぬ街 石井喜恵

八月 大橋廸代

かなかな見知らぬ街に居る心地
鯛や使ひきつたるボールペン
栄光の涙の笑顔カンナ燃ゆ
能面の微かなる笑み花仙人掌
斑猫や近道寄り道回り道

八月や紙面にあふる戦の字
免許証無傷で返し今年酒
みがきあぐ七堂伽藍秋豪雨
秋の雷高倉健の捨て台詞
雁渡し巴里へ飛びたつ独りっ子

にぎり酒 石山かつ子

みな無言 大村節代

研ぎ出しの津軽の小筥涼しさよ
研ぎ立つる鍛冶の涼しき山刀
酔ふほどに本音も少しにぎり酒
おしろいを咲かせ端唄の師匠かな
獣の匂ひ風に乗る来る茸狩

鬼灯やゆくりなく鳴り驚きぬ
薄味の車麩椀に花火船
秘めやかに車返しす花芙蓉
猪木舟ちよきぶねに男乗り込む赤のまま
赤のまま野辺の送りはみな無言

ノーマイク

小倉 倭子

星

迎

菊池 ひろこ

羅に気恥づかしさを隠す笑み
彼の肩にもたるる窓辺晩夏光
湯上りに夕風さそふ白粉花
おしろいの雨の夕べをノーマイク
赤坂の辻の三味の音花白粉

星迎いまだ渡らぬ橋あまた
久闊の硯乾けり星今宵
秋簾テレビ画面に先制点
仏灯へ斜めに置かれ茄子の馬
雁渡し小枝拾ふも庭掃除

長き道程

栢尾 さく子

油

照

五明

昇

稲光り見覚えのなき破顔浮く
磐座いはくらの露けき石ぞ手を合はす
色町の朝鮮あさがほ競ひ咲く
亡き人の若しや下駄音桃葉湯
でで虫に長き道程日暮くる

河川敷に重機の叫おらぶ油照
掘割に鯉の鼻出す油照
老いの身に野暮用ひとつ油照
夏瘦も知らず戦後を直走り
ポツダムの空の青さよ敗戦日

二重 瞼 境 延 昭

立 秋 島 津 初 花

夏瘦の二重瞼にある恪気
尾を振つて金魚は惚気聞く素振り
刃毀れの鎌を荒砥に敗戦日
メレンゲの白搔き回す原爆忌
蔦かづら振り子時計の教授室

忘れ物したかに燕の後戻り
立秋やカランの水の響きたり
立秋の風枕辺を開けて知る
花筒を伝ふお盆の花しづく
口中にイクラの弾く上げ花火

卵 椎野美代子

夏 薊 鈴木康世

夾竹桃ペットに白色レグホーン
固茹での卵に噎せぶ原爆忌
茹ですぎの卵暗緑原爆忌
ひよこにはなれない卵夾竹桃
夾竹桃 嗷ぶ咽に生卵

姉愛でし庭に紅濃き夏薊
夏薊静かに老いを諾へり
頬紅を知らぬ少女と夏薊
夏薊は沈黙の花燃ゆる花
さまざまのこと思ひ出す夏薊

居留地 田寺玲子

盆の月 永野史代

新涼の窓枠青き異人館
窓際のボトルシップや星流る
髪包み残暑の中を修道女
さやけしや少女五輪のメダリスト
居留地のオープンカフェを処暑の風

ゆるやかに正座を崩す夏座敷
独房のやうな病室盆の月
裏山におすまし顔の盆の月
ひと日の終はりすずやかな盆の月
斯くもかなしき天の使者なりかなかなは

蝸 十倉和子

一葉落つ 西山貴美子

城白く端正なりし今朝の秋
反戦反核声を励ます朝の蟬
爽籟に吹奏楽部音合はせ
蝸のソロにはじまるコンサート
ライトアップに浮き上がる城さやけしや

悼みごとありしか一葉落ちにけり
蕊あまた深部にまとひ紅芙蓉
退屈な鬼に招かれ濁り酒
人に俗眼水すましに復眼
衆目のなかの一点水すまし

盆 波多野 寿子

青き闇 茂木和子

追憶や静かに吊るす絵燈籠
踏み石のあたり明かるし門火焚く
盆僧のやさしさに触れ辞儀深く
夫想ふ此の姿よき瓜の馬
いつまでも燃ゆる送り火淋しかり

一畝の熟れ鬼灯や頑固爺
夜鳴らす鬼灯蛇を呼ぶといふ
蛸の朝な夕なの青き闇
ひぐらしの声の余韻が離れない
人の死のある日突然秋の蟬

独り将棋 星野和葉

裏木戸をくぐる岡持蓼の花
塩梅よく柚子味噌の出来豆腐買ふ
かなかなかな静かに沈む神の池
蛸や独り将棋の音確か
稲妻の筑波女体に突きささる

☆

☆

季音月

里の日暮

井上燈女

蝸や里の日暮を早めたり
 秋夕焼光の帯を利根川へ
 蝙蝠とぶ暮色からまる利根明かり
 読経の中へ中へと鉦叩
 山影の切り込んでくる稲の花

水の重さ

丸山 マスミ

水筒の水の重さよ原爆忌
 山里に闇のさざ波星祭
 社家町をめぐる清流櫻たで
 古書店の出窓に並ぶ仙人掌花
 鈴を振る確かな歩幅秋遍路

原爆忌

大場 順子

俊寛の化身か鳥の夏薊
 振り仰ぐ空は真青に原爆忌
 火櫓のただならぬ赤原爆忌
 鬼灯にほほげき色の日の暮るる
 小麦色の肌に皓齒晩夏光

つくつくし

森川 義子

閉校を惜しむ分校つくつくし
 秋めくや雲の百態見て飽かず
 遥かなる瀬戸の夕風青光り
 藍深き母の浴衣に博多帯
 夕顔の闇ふかみゆく軒端かな

浦和岸町

梅澤 佐江

ゆきあひの風も清かに夏深し
 墨の香や願ひ一つに星まつり
 垣越しに交はす言葉の秋めけり
 置屋跡片隅に咲く夕化粧
 浦和岸町白粉花の咲き初むる

虹 二重 渡辺 舍人

なぞらへて聴く恋唄よ虹二重
再会はいつも夢の中八月来
敗残の兵たり炎熱の競歩
新盆会無口のをのこの聞き上手
新盆の線香花火は耐へてをり

風鈴の尾 森本 早苗

鮮やかな日の丸剣士江戸切子
風鈴の尾の揺れ止まぬ軒庇
蟬時雨制し正午を黙禱す
吊り橋の主塔と競ふ雲の峰
盆の僧猫に愛想して帰る

天上天下 原田 想子

墓詣で会ふ人知らぬ人のなし
蓮咲いて天上天下しづかなり
夏蝶の白きが日差しまき散らす
袖口で球児等汗をぬぐひけり
八十路きて遠慮まだある昼寝かな

朝 顔 高島 寛治

金魚飼ふ戦なき世を願ひつつ
ラジオより洩れ聞く朗読原爆忌
晩夏光貼り紙靡く揭示板
朝顔を誉めて始まる路地住ひ
病癒ゆ朝顔に水惜しみなく

別 れ 鳥羽 和風

木犀の風を頂く枕経
戒名に花風の二字や秋桜
菊の香に埋もれて逝く柩かな
花芙蓉野辺の送りの薄化粧
淋しさや刈田に鷺の立ち尽す

芋 虫 宇田 白鷺

行く先はいづこせはしき源五郎
夏料理刺身の薄く出で来たり
芋虫や朝の大気の透き通り
湖を背に梨売りの店開き
裂け石榴父の呼吸の筆の跡

風のポケット

池田雅夫

三日月や野良猫の眼の青光り
秋の夜や風のポケットなる窓辺
秋の蚊の総攻撃を食らひけり
真つ向の風をふはりと花芒
知らぬことを知らずと応へ鉦叩

葛の花

松宮保人

祝宴やメロン出されて一本締め
黄昏れて盆灯籠に先祖達
歴史館出でて眩しき残暑光
鯖街道老舗は今も葛の花
百姓の親爺そのまま案山子立つ

白粉花

山田美佐尾

将棋指す勝負の一手夏座敷
卓球のサーブは祈り晚夏光
田の中に新の墓あり初嵐
初あらし格天井に天女舞ふ
母恋し白粉花の咲く小径

新涼

松井由紀子

金魚揺れひとり黙の弛みけり
出目金の出目と目の合ふ昼の地震
長湯して命潤ぶる秋はじめ
体幹を立て爽秋へ歩み出る
新涼や眼鏡拭きあげ開く句誌

夏あざみ

藤澤喜久

サーカスの去りし杭跡夏薊
SLの蒸気浴びをり夏薊
片恋やいつそソロで夏薊
向日葵の成績順に並びをり
オルガンに尋常唱歌終戦忌

油照

荒井俱子

油照唾をこくして畑仕事
球児の名「翔」と「太」多し油照
帚草咎ある如く括らるる
夏負や訳なく心がりがり
夏瘦の身ぬちひらたく診られけり

盆踊り 井口俊晴

盆踊り色香こぼるる指の先
短冊に赤い糸ある星祭
帚木や尖りし心丸くなる
炎天や犬の背中を焦がすほど
生ききつた天に腹向け油蟬

遠花火 野口和子

山越えて音のくぐもる遠花火
晩学のピアノ教室秋夕焼
踊り花と母の教へし百日紅
帰省子のみやげ話に沸く一夜
御巢鷹やコロナ禍流灯叶はずや

原爆忌 上戸千津子

打水も連日気化に追ひつけず
片足の鳥居気になる原爆忌
声のなき校舎の窓に晩夏光
立秋と雖も風の使者もなし
山騒がしあれが鴉の子別れか

半寿 松山清子

マラソンの北大ぬけて雲の峰
鴉の晴声張り走る柔道着
西瓜食ぶ半寿の我も種とばす
宿に聞く調べをちこち風の盆
桐一葉かすめて寺の大庇

う 町野広子

仙人掌の鉢の増えゆく独り者
鰻待つ間まに一句を箸袋
鰻食ぶ「う」の字一際大き店
幼等の駆けまはりたる夏座敷
親在りし頃のままなり夏座敷

打水 内田恵子

金魚鉢カフェの分厚きトーストパン
ダンサーの赤きスカーフ金魚玉
みんなんや児ははじめてのお使ひに
鎌首をもたぐるホース水を打つ
水を打つ庭石大きな深呼吸

神楽面 川崎道子

ここだけの話と言ひつビール酌む
鬼やんま単独好む天の邪鬼
両袖を帆にしバイクの盆の僧
秋霖や鶯張りの音にごる
稲光にたりと壁の神楽面

晩夏 井関礼子

山並の稜線くきと晩夏かな
明易やオリンピックに明け暮れて
国背負ひ東京五輪晩夏かな
バスデーも変り映えなき晩夏なる
籠り居て出無精癖も晩夏なる

夏休み 西浦千枝子

腕のギプスに屈託なき子や夏休み
盂蘭盆や突貫工事の高速路
仏壇の新種の桃は「幸苗」
一周忌の伯母の墓石に秋の蝶
萩の花僻地に洒落た駐在所

夏薊 岡野順子

風すこし雨の匂ひや夏あざみ
ほつこり立つ野道の雨や夏薊
風の来てつんと首伸ぶ夏薊
山の弁当雨走り過ぎ夏あざみ
直立の誇らしげなる夏薊

原爆忌 伊藤敦子

原爆忌いまだ涸れざる涙かな
日盛りの猫のびきつて通し土間
大西日ぎぎつと後円墳を押す
夏五輪メダルラッシュのアスリート
カレンダー西日いつきに引き受けて

☆

☆

季音花

昆虫研

近藤徹平

休暇明昆虫研のファーブルら
おしろいや心の底は見せぬ美女
夏茜荒川を発つ練習機
キャンプファイア別れのワルツ尽きぬ夜
鎖場や登るも退くもしぶく汗

千切れ雲

井上玲子

秋めくや池塘に影を千切れ雲
ロープウェイ眼下に映ゆる野萱草
夕づつや峡の湯宿のとろろ汁
絵蠟燭の焰ほむちゆたかに迎へ盆
こんなにも小さき位牌に盃蘭盆会

終戦日

大塚茂子

仏壇に水なみなみと終戦日
特攻の叔父を偲ぶや終戦日
終戦忌葉書の届く疎開の児
海風やグラバー邸にカンナ燃ゆ
歳時記に亡き人の文字秋燈下

鏡文字

福田千春

七夕の願ひ園児の鏡文字
思ひ出す父の七癖盆の月
白髪の兄と見てゐる盆の月
絵硝子の青き色射す夏館
頭領の一声強し大文字

ビオトープ

田中章嘉

ビオトープ炎暑の風も休むかに
水運ぶ蜂も多忙やビオトープ
透かさずに蜻蛉寄り来るビオトープ
強風に直立不動蓮の花
ビオトープ蓮華に先祖帰り来て

これやこの

正木萬蝶

此やこのブエノスアイレス盆の月
約束を違へて滲む盆の月
逢ひたくて逢へば諍ふ星今宵
心地好き君の口下手星祭
頭数やうやう揃ひ初尾花

真実

青木鶴城

炎天や孤島の渴き兵の餓ゑ
校庭に座す炎天のラジオかな
低頭の亜米利加大使原爆忌
志願てふ散華のまこと終戦日
真実は草叢の中夏の果

寄辺の水

野田静香

今朝の秋香草ゆらし風来る
禁色に輝く桔梗朝まだき
手に取れば思ひ出散りぬ赤まんな
底紅やスケートボード宙を舞ふ
杜昏し寄辺の水に映る月

夏終はる

日高道を

敗戦の弁こそ良けれ翌は秋
敗戦の悔し涙や鱚雲
夏雲やゲームセットの声響く
爽やかや秒速一〇メートルの風
頬伝ふ涙ひと筋夏終はる

立秋

飛永鼓

遮断機の涸れたる音や日の盛り
逢ふまじき人と出会ひし釣忍
一瞬の風に恋して秋に入る
この家も空き家となりて葛の花
見覚えの衣まとひし案山子かな

つくつくし

石川理恵

立秋といふ日やうやう暮れにけり
小さき手の掴まんとする遠花火
うれしくて唐黍ばかり茹でてゐる
つくつくし地球温暖化を嘆く
東京の雲もやうやく秋めきぬ

秋来る日 河野 はるみ

屋根を打つ秋来る雨や朝まだき
造作無くほほづき鳴らす幼妻
ほほづきの漿果の味や初恋は
君の名をただ書きつらぬ星祭
降る銀河池に映して星祭

雁渡し 宮崎 チアキ

潔し雨に打たれて墓洗ふ
心奥を灯す光や盆供養
逡巡の背を押したる雁渡し
雁渡し心の螺子を締め直す
ひと時の雨に艶めく百日紅

金魚 下川 光子

金魚屋に銀行員の来て長居
退屈な眼に映る金魚鉢
扇風機昭和の部屋の真ん中に
いつまでも離れがたきよ扇風機
扇風機持ちて現るヨガ教師

晩夏 佐々木 典子

雷雨浴びたる墓石をぬぐふ晩夏光
朝顔の青澄む露にふれてみし
珈琲を濃い目に淹るる晩夏かな
声つめて牛が鳴く牧いわし雲
今日も干す昨日の色の唐がらし

東京五輪 熊倉 千重子

コロナ禍と言へどメダルに沸く朱夏よ
尾瀬の夏先頭行くは赤き帽
盆用意未だに光る位牌文字
ふくらみが裂けて星形ききよう咲く
秋暑しさつぱり系のレシビ繰る

星祭 石田 慶子

星祭ぶらりぶらりとアーケード
チーママのラメのスリット星祭
いつからかグラス片手の盆の月
盆の月ため息一つ又一つ
阿波踊勝手連なる頭数

初秋 野平 美紗子

秋はじめ庭掃く日課今朝もまた
初秋や散歩の道がつい延ぶる
大粒の雨に落ちゆく桐一葉
秋の山父の墓石を洗ひけり
稲光見慣れし山を映し出す

秋めく 瀬戸 雄二郎

朝粥のことさら旨し秋めきて
さよならの後ろ姿の秋めきて
二の腕の白さが寂し秋めきて
自転車の巡査花野に無頓着
枝豆やみんな昔のままで良し

盆の時化 葛城 千世子

カーポートの天井飛ぶや盆の時化
オンライン踊る画面と盆踊
球止まり試合は中止夏の雨
有線流れ水嵩急に盆の昼
八月や代車をてこにソファー入れ

夏草 中野 彊

もろこしをはめば高原拡がりぬ
夏山に向ひてパンの焼き上がる
夏草のかく美しき信濃かな
涼風や浅間牧場起伏あり
かき水崩し楽しき会話あり

熱帯夜 宮崎 紫水

洪滞の高速道路風死せり
炎昼やぐらつくやうに時報鳴る
白塗りのベンチべつとり油照
カーテンの匂ひぶすぶす西日の矢
獣の臭気むくむく熱帯夜

紅葉濃し 後藤 綾子

ほこりたつ道に咲く蓼風の儘
葡萄の香胸いつぱいに富士目指す
父母逝きて早や半世紀紅葉濃し
蔦紅葉頼るものなく風にゆれ
蔦紅葉窓よりもるるノクターン

帰りの道 川島典虎

落蟬発見拾はむとすれば飛び立てり
山の途中湧水うましいざ行かむ
大炎気火傷せぬ様触らない
帰りは違ふ道なり蛙鳴く
座れば眠気もよほす夕涼み

☆ ☆

❖原稿募集

季音 (雪・月・花) 五句
水明集 五句 (巻末添付用紙)
山紫集 一句 (巻末添付用紙)
鼓笛集 三句 (編集部より依頼のあった方)
水明通信・随筆等自由にお送り下さい。
原稿締切 毎月二十五日必着
原稿宛先 水明俳句会 編集部
〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一〇―一二

俳人協会創立60周年

大会特集

大串章巻頭言

主要役員10句競詠

◆今月の筆

石 寒太
笹瀬節子

◆その時 俳句手帳
大高霧海

◆巻頭三句

齋藤愼爾
横澤放川

◆好評連載
藤枝リュウジ

神野紗希

鈴木太郎

575の散歩道
筑紫磐井

朧 潤

鴻野真知子

坂口昌弘
忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人

◆今月のイラスト

「京鹿子」

創刊百周年

俳句のつまみ
酒井佐忠

◆俳句と短歌の10作競詠

小野あらた

大森静佳

本の窓辺
二ノ宮一雄
一望百里

俳句四季 Haiku Shiki

2021年11月号

10月20日発売
定価1000円(税込)

<http://www.tokyoshiki.co.jp/>

東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

『水明誌』を繙く（水明八月号）

丹羽真一（『樹』主宰）

金輪際寡婦を貫き草を引く（二二頁）

梅澤 佐江

「田草取」「草取」「草刈」と似た季語がある。それぞれ、田圃の雑草を取る。田圃以外の雑草を取る、庭の草むしりも含む。家畜の飼料や肥料など草そのものが有益であるものを刈る。「草を引く」は主要歳時記には傍題にもない。しかしながら最近の歳時記には「草取」の例句として幾つか紹介されている。多分「田草引く」からの連想で、用例が多いので季語になりつつあるのである。掲句は、異論のない「草むしる」とすれば作者の決意がよりの確に伝わるように思える。

「金輪際」という言葉は元を正せば仏教用語で無限に深いというような意味で、俳句では川端茅舎が《金輪際わりこむ婆や迎鐘》で最初に成功させたのではないか。（山本健吉「現代俳句」参照）俗界では「断じて」という意味で使われるが、字面の厳めしさや発音の響きが強烈なので、こごぞという場面に用いられる。この句もそうした切羽詰まった体験を踏まえてのものだと思ふ。作者を全く存じ上げないので忖度無しで申し上げるが、何かあつたに違いない。そうでなければこごまでの覚悟をするだろうか。もしお若い方なら「草を引く」ではなく別の季語を配するであろう。そこそこの年齢の方と拝察する。「金輪際」などと持つて来た訳のヒントは直前の次の句にあると筆者はみた。どちらも渾身の句だ。

蛭籠秘すべき恋の無くもなし

妄言多謝

渓谷をつなぐトロッコ山桜（四七頁）

保坂翔太

もうかれこれ三十数年前になると思うが、私は掲句とそっくりの光景に出会ったことがある。もつともすでに廃線になっていてトロッコが走っているところを見たわけではないが。山梨県の塩山駅からバスで行ったところに西沢渓谷がある。この渓谷は遊歩道になっていて家族連れでもスニーカーで歩ける。途中に滝がありそこから先は軌道跡のレールが一定区間であるが残っていた。トロッコや廃線ファンにとっては堪らない。レールがひん曲がったり波打ったりしている箇所もあった。昭和四十三年まで木材を搬出して、以前は塩山駅まで線路が伸びていたそうで、登り傾斜などではその昔は馬が牽いたそうだ。見たかった。私の行った当時、ちょうど廃線跡に添って山桜が咲いていた。インターネットで調べたところ、遊歩道から外れた危険な箇所には、レールが現存しているようであるが、遊歩道では今もレールが残っているのだろうか。古びた楽しい記憶を思い起こしてくれた。

掲句は特に説明を要しない写生句で、作者もおそらく経験を思い出して作句したのであろう。このご時勢ではそれも宜なるかなである。私は本来現場派で、いま眼前のものを詠むことを旨としているが、このコ罗纳禍においてはそうはいかず、籠を緩めてしまっている。早く籠を締め直すような環境が戻ってくることを切望して已まない。

現代俳句鑑賞

網野月を

年取れば若いと言わる敗戦日
今なせか人で老女で葛棧

池田澄子

〔俳壇〕8月号・多謝より〕

多岐にわたるテーマで俳句表現を追求している作家であるのだが、人間の境涯についてのテーマはこの作家の主要なテーマの一つのように考えられる。第一句の座五の季語「敗戦日」は、昨今では十年前の東日本大震災の際に、何処にいてどうしたのかを語るように、その時に自分自身の体験していた境涯を語ろうとするのできる時空間を設定する季語なのである。加えて「終戦日」とはしないで「敗戦日」とするところに作者の心の構えが明らかにどの方向性を有しているのかを決定している。第二句はより大きな人間の境涯を把握しようとする意欲作として提示されている。

他に「愛し合うとは夕月を嬉しがる」がある。

うば桜支柱に沿ひて落花せり

河内雄二

〔俳壇〕8月号・うば桜より〕

上五の季語「うば桜」が主語になって、中七座五は副詞句と述語の関係を有する構成である。全七句は「うば桜」の連

作になっており、他の句には季語「うば桜」のイメージで句全体を包含するような作品もある。作者は「天狼」の流れを汲む作家なのである。山口誓子の提唱する「物俳句」からの延長線上にある「即物俳句」を目指して活躍されている。

かんたんな鍵を回して夜の秋

こしのゆみこ

〔俳句四季〕8月号・半券より〕

詩語を創り出している作家である。従来から一般に認識されている詩語を並べて雰囲気だけを醸し出すようなことではなく、平素の言葉を組み合わせたり、その言葉の使い方、詩語としての性格を与えるというか、見出しているのである。平素の言葉であるので、一読で理解しやすく、且つ創り出された句意の新鮮さにも驚かされる。これは、この作者が独自の世界観を有しているからなのであろう。

他に「八月の半券大事青い空」がある。

抜け道の代田明りの遠会釈

上野みのり

〔俳句四季〕8月号・明日を待つより〕

田圃沿いなのか、田圃の中を通る道なのかは分明ではないのだが、まだ田植え前の「代田」であるから、障蔽物がなく

て見通しが効いているのである。いくらか遠くてもお互いに顔が確認できているということであろう。やっと「代田」まで漕ぎつけたという農事の捗り具合を愛でているのである。

洗ひ上げたる青梅が笊の中 井上康明

〔俳句〕 8月号・盆地の夏より

日常を詠んでいる句である。先ずは「洗ひ上げたる青梅」に視線が集中して、その「青梅」が「笊の中」にあることを後に確認した、という句意である。「青梅」の主体に対して、その輪郭を「笊」という脇役で固めた構成である。であるから、中七の後に軽い切れを「……が」で生じさせていて、座五の後に句全体の切れを作り出している。

他に「己が座にあり八月の駒ヶ嶽」がある。

夜の果にあかつきのあり冷し桃 浦川聡子

〔俳句〕 8月号・虹よ来よより

素晴らしい緊張感と情感の凝縮を感じる。俳句で表現できることの限界にチャレンジしているようでもある。「桃」は、エロチシズムに極まっていると筆者は考えていたのだが、「冷し桃」として今までの「桃」の本意を超越した次元に踏み込んでいるように思われる。

他に「父はいま花野をりをぬ行きつけず」「昏睡の母にはかな虹よ来よ」がある。

さらさらと砂のバズルや蟻地獄 宮地瑛子

〔俳句界〕 8月号・新作巻頭3句より

家裏の軒下や寺の御堂の縁の下などの「蟻地獄」が連想される。作者は「蟻地獄」の観察に終始したのだろう。そしてついに獲物がかかり、ずり落ちてゆく様を見定めたのである。巢の逆円錐の側面に浮かび上がったバズルの紋様を見つけたのである。

草の絮飛ぶどこからも遠い町 坂本宮尾

〔俳句界〕 8月号・自選30句より

「どこ」からも遠い町」は、逆に考えれば、どこへ出るにも距離のある町ということであろう。そんな社会との遠さを属性とする町へも「草の絮」は飛んで行くことが出来るのである。自然界の弱者の秘めた心の強さを叙している。

木瓜の花遊び上手な風が来る 羽村美和子

〔句誌『ベガサス』第11号・副反応より〕

上五の季語「木瓜の花」と中七座五の関係性が、いわゆる二物衝撃（取合せ）であるのか、季語を取り巻く環境として中七座五が叙されているのか、どちらかということである。要は、この関係の構式に新しさが感じられるのである。筆者は、「木瓜の花」に「風が来」ているのだと解釈したのだが、実は作者自身もこの風を感じ取っているのである。散文ではないので主語述語の厳格な関係性の構築を回避し、そうすることによって、含みを持たせることに成功している。

他に「カサブランカ副反応に軽い恋」がある。

新同人紹介

— 令和3年 —



岡田宣子

水明入会 令和元年
所属句会 蛸蚪の会

沿線の菜の花揺らす黄の電車
蛸や家路を急ぐ女たち
月光や彼の流刑地の能舞台
山間の一集落の稲架の道
寒月や深夜の保線鳴り響く

この度は同人にご推挙頂き有難うございます。「はじめの俳句教室」の網野月を先生が、受講者の「蛸蚪の会」を立ち上げて下さり、以来、先生の一字一句丁寧な指導と明るいお仲間による楽しい句会に恵まれ二年になります。俳句を通して豊かな日々を送る事が出来ればと思っております。今後共宜しくお願い致します。



木村るみ子

水明入会 令和元年
所属句会 蛸蚪の会

参道の木洩れ日の風夏近し
突然の着信メール花蘇枋
レース編むやはらかな風通り過ぐ
挿木する鉢の増殖誕生日
路地裏に華やぎ添へる立葵

この度は「水明」同人にご推挙頂き有難うございました。別所沼での「はじめて俳句」の参加より入会させて頂きました。月を先生のご指導で句友と共に俳句作りを楽しんでいます。俳句の奥深さが少しわかって来て難しさも感じています。

今後共、宜しくお願い致します。



小駒さち子

水明入会 令和元年
所属句会 蛸蚪の会

田の水の先にはためく武者幟
着陸や窓いつばいの草の花
枯葉舞ふライブに酔うて帰る道
初富士や丸き地球の海の上
ふるさとよ歌と飛び出す石鹼玉

この度は水明同人にご推挙頂きありがとうございます。「はじめての俳句教室」の山本主宰と網野先生のご指導に感激し入会致しました。月を先生ご指導の「蛸蚪の会」で、歳時記と電子辞書とカメラと音楽とペンを手に楽しく学んでいます。会の皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。今後共ご指導の程宜しく申し上げます。



反町 修

水明入会 平成三十一年
所属句会 第四例会 新樹の会
芽吹句会 円卓の会

暖かや子犬座れる膝の上
禅寺の体験修行夏料理
夕闇をそぞろ歩きの藍浴衣
外出になほ手放せぬ秋扇
茶の花や塵一つなき朝の庭

この度は同人の輪に加えていただきありがとうございます。山本主宰、句会の先生・先輩方にご指導を賜り感謝申し上げます。

地元の同好会で俳句を始め、更に俳句結社で俳句を学びたいとの思いが募り水明に入会させていただきました。Life with haiku をモットーに俳句に精進したいと思いますので今後とも宜しくご指導をお願い致します。



樋口元美

水明入会 令和元年
所属句会 蛸蚪の会

蜜柑山切り拓いてや温泉宿
白木槿ふはりと風が渡るよな
刺されても殺生はせず夏の終り
等々力の不動の滝や落差なく
新涼や素肌にしみる化粧水

この度は同人にご推挙して頂きありがとうございます。俳句は四季の移り変わりや自然観察と、日々の暮らしを豊かにしています。

まだまだ未熟者ですが、主宰をはじめ、月を先生や諸先輩方にご指導いただき、句友たちとともに楽しく作句していきたいと思えます。これからもどうぞよろしくお願い致します。



檜鼻ことは

水明入会 平成三十一年
所属句会 若狭水明会

たんぼぼや瘡蓋のある膝小僧
天に星海に海月の夜釣りかな
まだ熱き屋根に寝そべる星祭
スコップに雪の深さを尋ねをり
松の葉に止まるしづくや初明り

若狭に住いしています。句を詠み始めたのはここ数年のこと。退職して五年がたち、仕事はぼちぼち。以前から趣味にしていた生け花や写真と共に俳句の勉強を楽しんでいる今日このごろです。句を通して新しき出会いがありますように。どうぞよろしくお願ひいたします。



本橋稀香

水明入会 令和二年
所属句会 第一例会 若鮎句会

紅梅をほろほろ零す雀かな
薄紙を外し雛に見つめらる
子の願ひ私の願ひ星祭
もう誰も登らぬ火の見鯛雲
白菜の漲る重さ猫車

此の度は、水明同人に御推挙頂きありがとうございます。俳句を始めるまでは気にもかけなかった事象が、季語として目に飛び込んでくるようになりました。浅学な私ですが、同人としての自覚を持ち俳句を続けていきたいと思ひます。ご指導の程宜しくお願ひ致します。



山中いちい

水明入会 令和二年
所属句会 第二例会

土佐浜や俯き咲ける百合の群れ
灼けた砂足跡の癖崩れけり
夕べには行き倒れるもよし蝉時雨
和音なる般若心経百日紅
夏の果渡海の寺の大蘇鉄

同人にお迎えいただき誠にありがとうございます。中学生の頃より母に届く雑誌「水明」を読んでおりました。自分の句が掲載されているのを見て嬉しく存じます。字数や季語の制限の中で、場面を切り取る表現に面白さを感じます。ことばと感性を磨いていきたいと存じます。よろしくご指導いただけますようお願い申し上げます。



横山礼子

水明入会 令和元年
所属句会 蛸蚪の会

行間に浮かぶ眩き水温む
田仕事の人みな白き春の雨
新涼や会ひたき人に会へぬまま
春待つや小さき社に小さき願
朝日影初刷の文字照らしをり

この度は水明同人にご推挙頂きありがとうございます。砂浜で遊んでいたら大海へ誘われたようです。早く泳ぎ方を覚えて美味しい魚や綺麗な珊瑚を探しに沖へ出てみたものです。

今後ともご指導よろしくお願いいたします。



綿貫ひさの

水明入会 平成二九年
所属句会 蛸蚪の会
はこべ句会

水温むほいさほいさと泳ぐ亀
騙す友有りて楽しき四月馬鹿
かき氷ボードゲームの休戦中
飛び六方園児に交る鳥の子
髪洗ひ母そつくりに誕生日

新同人のことは真に有り難く思います。そして「水明に所属しています」と、はっきり言つて良いのですね。伝統ある水明にお誘いくださった大先輩の栢尾さく子さんに感謝しております。俳句は未だひよっこですが「野遊やこんぶごま塩焼たらこ 月を」この私のお気に入りの句を傍らに、句作りを楽しみたいと思います。

毎月25日発売 定価1000円(税込) 月刊 **俳句界** 2021年 11月号

特集 神話と伝説の息づく地 **九州俳人競詠**

- 九州俳人競詠 野中亮介 小浜史都女
- 吉岡乱水 福永満幸 秋篠光広
- 布施伊夜子 淵脇護
- 忘れえぬ九州俳人
- 野見山朱鳥：野見山ひふみ／杉田久女：
- 坂本宮尾／篠原鳳作：前田霧人／横山白
- 虹：寺井谷子／伊藤通明：柴田佐知子／
- 倉田紘文：稲田眸子

特別作品21句 **高崎公久**

☆ラビエ 俳句界NOW **加藤峰子**

魅惑の俳人 **追悼・有馬朗人**

- インタビュアー 対馬康子
- 30句セレクション 天野小石
- 論考 梶 俱認 ○一句鑑賞 永井由紀子
- 山田浩司 小川洋 横井理恵

★セレクション結社「しなの」丸山美沙夫

私の二冊 **中山宙虫「霏霏Ⅱ」**

対談 **阿武野勝彦** (テレビプロデューサー)
佐高信の甘口で「コンニチハ！」

「俳句界」投稿欄 一流選者14名！
日本一充実の投稿欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社 **文學の森** | 株 求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

山本 鬼之介 選

夏
季
競
詠

兼
題



「夏野」・「炎天」 傍題可
「見」 (詠み込み)

大夏野駆くる真白き放れ駒
帽かぶれば誘ふ夏野果てしなし
故郷の夏野親しき土踏まず
のつべらぼうな顔の行き交ふ炎天下
見覚えの姿涼しき遠会積

さいたま 大場順子

炎天や読書と決めし日の奢り
炎天や「尾島春夫」に見る常侍
天に伸び風も唄ふや夏野原
夏の月蔵の窓より見る寝顔
たんす奥玉虫色に見惚れけり

鴻巣 大塚茂子

原始蓮にまなこ見ひらく兵馬備
炎天に除幕の手套ねばりけり
豊胸を拉ぐコルセットの炎気
祝砲の硝煙なびく大夏野
娶らずに羊追ふ杖夕青野

和歌山 大橋旭代

撫で付けるコールマン髭炎天下
炎天や功七級の無縁墓
「再見」と交はす空港夏の月
地と空の境に風車夏野原
草薙剣が欲しき大夏野

さいたま 染谷正信

花なくば分らぬ名前夏野行く

さいたま 網野月を

見たくなき彼奴に遭つてしまふ夏野

脱サラや炎天のなか名刺置く
少年の殻脱ぎ捨つる夏野かな

さいたま 新 曆文

炎天に曝す我が身やレクイエム

熱帯魚吾に欠点見せてくれ

炎天や恋の名残に見たき星

炎天や四角い空に歪むビル

月を見る夏の月見ゆ月を見ゆ

北の大地夕日呑み込む夏野かな

牧場のサイロはるかに大夏野

上 尾 横山君夫

川 口 矢作水尾

立山の雲の中なる夏野ゆく

炎天を種火のごとく歩きけり
全身を見透かされさう組のわたし

炎天を列伸び切つて帰校せり

大夏野風が色もつうねりかな

炎天下水禍の土砂を掻く媼

自動ドア開き炎天へ押し出さる

見え隠れして草原を夏帽子

石仏や兵ごとき炎天下

村の子のでんぐり返し大夏野

さいたま 日高道を

さいたま 石山かつ子

目を閉ぢて風の声聞く夏野かな

いきいきと牛の反芻夏野原
犬笛は人に聞えぬ大夏野

炎天下信号待ちの人の黙

試射か誤射銃声一発炎天下

炎天下フェークニュースの彷徨へり

片蔭や監視カメラに見つめらる
炎天や鳶はつばさを水平に

見沼田の竜伝説や夏の雨

響動めきと球児の歓喜炎天へ

神 戸 森本早苗

炎天下輪の息で女坂

石井喜恵

見解の相違一息シャーベット

炎天下埠頭に吊すクレインの荷

怪談や見栄張りたがる次男坊

繋ぐ手の大きさが嬉し夏野原

見当をつけて仰ぎぬ梅雨の富士

夏野原捨てて行ききたき倦怠感

一本の道を頼りの夏野かな

見守るは励ますことよ星涼し

夏野行く言葉少なし父と母

夏野原出土の美女は無国籍

炎天のハーレーダッビットソン急発進

日本の猿蟹合戦見る晩夏

信書見る文香ぶんかうはらり夏の夜

金盃ほどの夕陽や夏野原

ふかぶかと大気吸ひ込む青野かな

見霽かす甘藍畑土光る

見目悪しされど味よしへほ胡瓜

炎天下もんぺ姿の母想ふ

はてしなき旅のはじまる夏野かな

こころの闇に炎天を棲まはせり

手相見は黒衣の女夏日影

夏野にぺたんと座るは一兵卒のごと

炎天を来て炎天へ戻る僧

一見を主座に据ゑたる夏座敷

火の鳥の羽音空耳炎天下

夏野原犬も輩もいばりする

一斉に精霊立ち昇る夏野

地震の地の未だ立ち入れぬ夏野かな

さいたま 大村節代

品格を忘るる女神炎天下

北斎の波のTシャツ炎天下

暮れなづむバックミラーに夏野原

見取図の看板褪せしバンガロー

高崎 原田秀子

炎天へぐいぐい硝子のエレベーター

空つぼの檻へ炎気の充滿す

歌垣の山見ゆ合歓の花盛り

直球の言葉投げ合ふ青野かな

横浜 永野史代

夏野原まつ直ぐ歩くむつかしさ

白百合や見様でかはる立ち姿

炎天に生氣吸はるる花時計

高みへと少女の帽子夏野原

秒速で伸ぶる若竹仰ぎ見る

魚に見ゆる小鳥青やか木下闇

炎天を仰ぐ眉毛に重さあり

炎天を来て湧水で身を拭ふ

炎天やピルの谷間のカフェテリア

川口 野田静香

前方に富士・愛鷹を大夏野

見飽きざる富士と夏雲田子の浦

さいたま 椎野美代子

神奈川 鈴木康世

神奈川 鈴木康世

神奈川 鈴木康世

厩朽ち夢まぼろしの夏野かな

さいたま 洪谷きいち

東京 鈴木和子

秘湯探して標なき夏野行く

昭和遠しや爆撃知らぬ大夏野

パラグライダー大鷹になる大夏野

赤城嶺を見渡す夏野寺詣で

炎天やここは恵林寺甲斐の国

為政者の見識を問ふ花茄子

炎天や八甲田山死の彷徨

奥入瀬の水辺の欲しや炎天下

禿げ上がる出世の額や炎天下

草加 小倉倭子

さいたま 松井由紀子

炎症の足を引き摺り炎天下

炎天や先行く夫を見失ふ

野放図な子等が夏野を駆け巡る

蔓草のざり落ちさうな炎天下

見得張つて来し方想ふ月見草

砲煙のぼつぽつ富士の大夏野

見納めとなるやも知れず江戸火花

光塵のきらめき残し夏野暮る

カルデラの青野を燃やす夕陽かな

さいたま 保坂翔太

風の切つ先飛び付き撥ぬる大夏野

夏野原分水嶺へ続く径

炎天に石裂く鑿火の匂ひ

吉住光弥

炎天のビルの屋上朱の鳥居

炎天や男寡黙に株打つ

精霊の見え隠れする新樹光

炎天や我に残生のころろざし

夕映えの火の見櫓や遠郭公

仰臥して見ゆる愚かさ雲の峰

炎天に影を吸はれて生氣失す

熊谷 越田栄子

明石 田寺玲子

炎天や人も地球も水と生く

わが街は雲一つなき炎天下

夏野へと打球大きく弧を描く

炎天へのびゆくクレーン林立す

結論は元氣一番夏野行く

朝まだき白馬いなく大夏野

見取図は北が上なり夏の星

炎天へからくり時計をどり出る

コンテナの積み込まれゆく炎天下

今は昔謁見の間や夏館
相聞埋めしはいづこ夏野原

久喜 梅澤佐江

青野より白帆のやうな少年来
炎天や櫛並木の風の贅
炎天下黙禱といふ無音界

点景の牛動かざる大夏野
麦稈ロール夏野を限る十勝岳
炎天に風を分け合ふ天守閣
炎天下涼やかに立つ托鉢僧
いとさんを透かせて見する麻暖簾

さいたま 五明 昇

点点と牛が草食む夏野原

さいたま 反町 修

炎天下負けし球児の男泣き
鬪牛場西日さし込む立見席
唯一人サックスを吹く夏野かな
炎天下舗装道路に足取らる

マンホールの蓋に花の絵炎天下
炎天やはせをの句碑に読めぬ文字
炎天に立つは和顔のビーナス像
無言劇のはじまる気配夏原
坐して見る夏野にいつかひとりなり

曲淵徹雄

翡翠を見てきて瞳かがやく子
夏野原わだち二本が道になる
初恋を夏野の果てに置いて来し
炎天の渋谷まよつてゐたりけり
炎天や何処を行つても上り坂

東京 石川理恵

スマートフォン夏野の指をひろげたり
あれこれと試す炎天下のスマホ
ララバイや近くて遠き夏野道
見つめ合ふ小指と小指梅雨明けぬ
夕焼をいくたび仰ぐ夏野原

西山貴美子

単線やスイッチバックして夏野
馬鈴薯の花の大地よ北見晴
見渡せば夏野いだきて岩手富士
土煙を立てて馬群や炎天へ
炎天に岳父の遺骨懐きけり

さいたま 加藤でん治

炎天を来て一木に凭れけり
理科室の人体模型炎気吐く
伸びやうとしても縮むや炎天下
落日へ口笛吹きて行く青野
裏木戸を閉め仰ぎ見る夏の日

茂木和子

炎天に前行く作務衣顔見たし
炎天下仮面をつけし覚えなし
木偶坊となりし我が身よ炎天下
トカチエフならぬでんぐり返し夏野原
庭過る見掛け倒しの墓

さいたま 星野和葉

大夏野空先駆くる熱気球
夏の原かはたれ時の寂光土
見巧者の掛け声ピタと夏歌舞伎
炎天下白き腕ただ眩し
炎天下お賓頭虚様の黒光り

さいたま 丸山マスミ

着陸体勢眼下の夏野薙ぎ倒す
大夏野透明の馬駆けり来る
放牛の屯を迂回夏野行く
草原の牛を遠見に舟遊び
海夕焼やうやく見付かるはぐれ牛

和歌山 十倉和子

不意打ちに炎気のおそふ不整脈
町なかの午後の気怠き炎天下
炎天や鳥の早技砂遊び
夏野原なほ北に行く一両車
白南風や帆影の見ゆる練習船

川口 森川義子

炎天の無音の所作の弓道場
山あひの荒田は青野となりけり
夏野原我万葉の舞台ゆく
震災の断層見せて合歓の花
炎天や坂とS字の仲仙道

さいたま 高島寛治

むんむんと男盛りを嗅ぐ夏野
新幹線夏野が変る鳥瞰図
夏野原犇く命万と居り
炎天を突き刺す尖り御神木
炎天や飯場の隅に火消壺

若狭 鳥羽和風

見開きのグラビアで選る七月号
炎天のマンホールには鉄の蓋
引かれゆく涎の牛の夏野道
炎天下四角の墓が列正す
扇風機ガラスが仕切る見学路

境 延昭

放牛の夏野広げて移動せり
ドラマ館出て炎天に焼かれけり
田畑見て農の子育つ雲の峰
野仏の風化のしるき夏野かな
信号機を待つ間いらつく炎天下

深谷 井上燈女

アイアンを振りて見下ろす夏野かな

若狭 宇田白鷺

太陽の軌道駅まで炎天下

大阪 由良ゆら女

夏野原風来て山の重かりけり

夏の原残像青く落日す

声あがるグラウンドゴルフの炎天下

炎天を帰りシベリヤ抑留記

炎天に打つ玉音のひびきけり

太極殿玉座青野の風清し

見下ろして巖打つ波の音聞けり

青野原彼の世へ風の電話口

夏野割る二両電車の前部席

松宮保人

炎天下パンクの自転車と僕

大和 藤澤喜久

夕照を背に少年の夏野原

炎天下もしも自販機歩けたら

終戦忌父を荒野に見失ふ

炎天下メトロポリスが熱を吐く

炎天や会葬の列整ひて

炎天の日時計正午の晷針差す

炎天下撫づ先人の句碑熱し

炎帝の霞ヶ浦へ飛行機雲消ゆ

炎天や奈良の都の鬼瓦

檜鼻ことは

ジャンプする犬のどや顔夏野原

さいたま 井口俊晴

炎天や斜めにビルの立つ渋谷

夏野ゆく大河一筋ど真ん中

夏野原歩けば山の遠ざかる

炎天に煌く一点眩むほど

指笛の鳴らぬまま行く夏野かな

炎天の馬頭観音水涸れて

母真似て味見は小指冷蔵庫

見るほどにラムネの壺は器量よし

姉妹あねいもと浮くや沈むや夏野原

さいたま 梅澤輝翠

一筋の風の道なる夏野かな

池田雅夫

肩車父と兎はしやく夏野原

遠嶺の蒼より青く夏野原

炎天下足を突き刺す浜の砂

炎天の大路波うつアスファルト

炎天の城跡に立つ土の末裔

テント村星の動きを見てあたり

短夜の見覚えの字や小抽斗

女郎花男の嘘を見抜く魔女

行田 近藤徹平

春日部 仲田利子

夏野原特攻基地をしのぶ墓碑
雷響や見切り発車の無人駅
炎天下五回半ばをノーゲーム
道の駅味見は地場の初メロン

ゆつたりと雲動きをり夏野かな
夏野原星空仰ぎコンサート
森林限界出でて更なる炎天下
塩舐めて山頂めざす炎天下
紐に見えたる干されし蚯蚓アスファルト

炎天下顔をざぶざぶ洗ひけり

さいたま 山田美佐尾

さいたま 青木鶴城

草野球傷負ふ少女青野原
馬放つ男遠目に夏野原
炎天下磯浜の岩化石跡
鉾祭さながら美術館見むと

炎天に縦走の列肩まくり
稜線の小径果てなく夏野かな
匍匐して見慣れぬ羽根を夏野原
炎天の山の渴望陰ひとつ
山小屋に日焼の見知り甘茶蔓

指呼に立つ富士父性めく夏野原

井上玲子

橋本京子

満身にみどりの風を夏野原
炎天下重機あやつる漢の背
炎天や亡夫に石積む恐山
這松のかげを雷鳥目を見張る

妙齡に声かけらるる炎天下
炎天や床屋のサイン回る音
味見して父母に供へる一夜酒
短夜や母見失ふ夢の中
切り株にごくり水飲む夏野かな

苔の花石と見違ふ野の仏

荒井俱子

栃木 佐々木典子

逆点に継ぐ逆点や炎天下
球児らの「ドンマイ」の声炎天下
炎天に影を短く修行僧
昼寝覚め極楽浄土見て来た

炎天や垂直に降る足場の声
炎天へ窯場の汗を拭きに出る
走る子の両手は翼大夏野
夏野行く羊の群れの遅々として
炎天へベットボトルを抱きてゆく

子を探す夏野に尖る母の声

さいたま 本橋稀香

炎天に吼ゆるキーパーオウンゴール

地の秘密隠してしまふ夏野かな

横浜 福田千春

翹揚げ大蠟螂の見得を切る

炎天の信号待ちの五十秒

向日葵の吾を見つむる凸レンズ

見得を切る子供芝居や夏祭

コロナ禍の見出しいつまで梅雨草

夏野来て裳裾の色の深まりぬ

青き野や楽の方へと羊たち

熊倉千重子

わけ行かば朽ちた道標夏野原

さいたま 田中泰子

炎天来てしばし言葉を失へり

縁者らと墓で落ち合ふ炎天下

炎天来て水垢離のごとシャワー浴ぶ

睡蓮に見とれ木道踏みはづす

朝風に今が見頃か古代蓮

阿蘇寝釈迦の胸のふくらみ夏野行く

向日葵の瞳に心見透かさる

左向きの見返り阿弥陀青楓

炎天や立看板の文字反らす

熊谷 神田治江

炎天の五百羅漢の顔かたち

杉戸 佐々木史女

駄馬の脚夏野に太く歩き出す

浅漬の夏大根を味見せり

炎天や黒髪切りてひとりごと

炎天下和太鼓の音風にのり

炎天の庭に疲れし子の玩具

底抜けに笑へる仲や炎天に

鉄線花女が女見る眸して

短足の犬転げ来る夏野原

惜しみなき陽射しを浴ぶる夏野原

さいたま 宮崎チアキ

夏野来て大利根岸の航ひ舟

百草の息吹あふるる大夏野

鳶職のシャツが塩吹く炎天下

無人五輪の息災祈る炎天下

ゼロ並ぶスコアボードや炎天下

自転車や炎日なれば前のめり

夏野原リード外せとせがむ犬

めくるめく夢見託する夏の星

橋数多見上げて下る納涼舟

さいたま 笹本啓子

熱気球青野の空へ旅に飛び

夏野来て轍も深き草の跡

炎天下研ぎ澄ましたる日本刀

炎天や僧焚く段木堂閑か

夏野原ポン菓子を見る人の群れ

さいたま 田中章嘉

夏山の輝き見むと信州路

夏野原キャリーバックを引く嫗

炎天を睨み返すや鬼瓦

炎天下口ぱくぱくと鯉黒し

見て見てと子等が指差す虹二重

草加 河野はるみ

炎天を来てポンプ井戸しやかりきに

炎天のビーチ駈けぬく全力で

夏野行く突当りには荒ぶ海

短夜や追はるる夢をまたも見て

滝見上ぐ靈氣受けつつ祈りたる

東京 松山清子

炎天にオリンピックの五色雲

炎天下満身創痕の五輪かな

グライダーのふはりと着地夏野原

流れ行く雲影落とす夏野かな

見る限り日光キスゲや霧ヶ峰

東京 山中みどり

炎天にクレーン一基首振りぬ

風吹きて見え隠れせり茗荷の子

打水の仲見世通り鳩一羽

炎天や球児の胸のマーク消ゆ

踏み分けて青春の過去夏野かな

さいたま 村杉清吉

老の坂青野の青に噓せもして

翳る前汽笛のかげる夏野原

燭台に似し薔薇の木の立つ炎天

炎天やカメラへ扉閉つ老舗

見取図に頭を寄せ合へる冷房裡

菊池ひろこ

塩梅の小皿味見の夏小鉢

「伊吹山」父のいち押し夏野行く

恰好はスペシャリストよ夏野行く

目標のバンダナは赤夏野行く

ダリの時計歪みに歪む炎天下

清水桂子

鬼石 野口和子

犬の寝る風の道あり炎天下

新築の足場の眩し炎天下

カサブランカ見目麗しき庭となり

川の音して川見えず大夏野
山寺の宝珠の光夏野原

ローカル線吸ひ込まれゆく夏野かな

春日部 諏訪サヨ子

兎等の瞳にサイロ聳ゆる夏野原

若狭 山崎郁子

夏野原地域興しの緬羊シヨ一

炎天下魚籠に干したる川魚

向日葵の行く末見えぬ迷路かな

炎天にさくら耳なる猫がゐて

伊奈 菅原卓郎

この先は山羊に任せる夏野かな

廃線の鉄路飲み込む夏野かな

一見の店の突出し冷奴

見所はあれやこれやと納涼船

夏野原遠くに見ゆる古墳群

蕨 細井良子

見渡せば色千年の古代蓮

炎天下バス故里へ土埃

凜として生家は在りぬ炎天下

古へを偲ぶ蛍の乱舞見る

夏野原風を捉へて鳶舞ふ

草加 外村紀子

ローカル線終着駅は夏野原

炎天や水掛け祀る慰霊の碑

炎天や三線ゆるりと島の宿

茅の輪くぐり見上ぐる雨の御神木

炎天や客十人の映画館

是が非でも行かねばならぬ炎天下

天水の滴り落つる炎天下

炎天や山からの風心地よし

夏野来て肉を焼く人食ぶる人

坂炎天馬の記憶に鞭の音

さいたま 栢尾さく子

機銃掃射あびしあの日のあの夏野

米野菜負ひて夏野を幾度も

庭園灯礎石が見せる大蜥蜴

炎天往くさながら吾は弱法師ようぼうし

即身仏見し炎天の湯殿山

西幅公子

延命水力に登る炎天下

大夏野空へ飛び出すホームラン

炎天や盥プールに水しぶき

どこまでも風の木道夏野ゆく

炎天を戻りて女膝くづす

相模原 町野広子

炎天や折皺くつきり藍暖簾

炎天をバイクで過る若き僧

夏野原犬も子供もブーメラン

群れたがる野生馬夏野遥かなり

軽やかな見目も大事と更衣
海開きこんな処に見張り番
山里やすつくと遠見の桐の花
炎天下歩き切つたる東海道
炎天の重機の黙よ安らぎよ

さいたま 斉藤みよ

地図片手軍師の墓へ炎天下
近道や夏野横切り陣屋跡
飛石の形気になる夏野原
夏野原由来札あり「庄屋跡」
炎天下海を見つむる埴輪群

神戸 上戸千津子

炎天やレースの行方転転と
廢線の列車を偲ぶ夏野かな
夏野原むかしばなしの由縁かな
青野夕景佇む人と歩む人
悠然と吾を見据うる蝦蟇

平塚 丸屋詠子

牧場の看板遙か夏野行く
炎天の部活帰りの販売機
炎天下長い列あるカレー店
炎天の稚児の白塗り紅を差す
物見高い夫は江戸つ子早世す

東京 石田慶子

手相見の大きなルーペ土用東風
炎天下脳細胞の蒸発す
少年の逞しき脚夏野原
Tシャツの目をむくドクロ夏野かな
紙きれのごと炎天の街をゆく

さいたま 内田恵子

夏野原車窓とりまく牛の群
撮影のドローン不時着大夏野
見ず知らずの人と挨拶登山道
日傘閉ぢ建売住宅下見する
白南風や遠見の人は彼に似て

和歌山 川崎道子

炎天や棒一本の影に入る
炎天下黒酢を醸す千の甕
黒猫の不敵な眼炎天下
ゆつくりと夏野傾け観覧車
夏野来て面影さがす風の音

大阪 伊藤敦子

見上ぐれば入道雲の力こぶ
どろんこのボールころがる夏野かな
分薬ぶんやくのこぞりてすすむ炎天下
老農の棒切れになる炎天下
青野すすむいよいよ後期高齢者

鬼石 榊原聰子

二人乗り自転車帽子とぶ夏野
追ひ追はれ雲の影ゆく夏野原
葬列の白と黒行く炎天下
夏瘦のベットに五輪見る夜更け
炎天を逃れ机上に菊差し芽

横 浜 山岸弘子

風立ちて草のあへぎや夏野原
リュックの背連なりあうて青野行く
ジェラートの味見一匙ねだる夫
炎天の青滾り立つ鯨雲
炎天に白く反射す黙の街

さいたま 菅原真理

ざわわざわわ戦が潜みある夏野
炎天抜け上高地へとバス喘ぐ
駆けて来てカレーむさぼる子炎天
途中まで出て炎天を引返す
秋草がちらちら見えし夏野かな

町 田 瀬戸雄二郎

切り通し抜けて夏野の輝きて
転がりて転げて子等の夏野かな
炎天やメール絵文字の瘦せて居り
炎天や北の大地の果てまでも
仰ぎ見る星座親しき夜釣かな

篠崎紀子

山襷の深さに滝の見えかくれ
目薬さし炎天の町改めて
ランドセルの鈴りんりと炎天下
パラグライダーの影落しゆく夏野原
擦れ違ふ人に一声夏野原

和歌山 西浦千枝子

大空に夢舞ひ上がる夏野かな
夏野行く頑固親父の怒り肩
炎天下微動だにせぬ托鉢僧
炎天下よろめきながら仁王立ち
ほの見ゆる日傘ゆらゆら祇園坂

佐藤克之

炎天下誘導員の手の黒み
炎天下ビデオカメラに笑むモデル
山深し白糸の滝見え隠れ
美しの塔を目安に行く夏野
帰省して夫と見上ぐる山の星

さいたま 岡田宣子

炎天やゴッホの画集片づける
名画座に名画見にゆくソーダ水
炎天にマリー・ラフォレのふくらはぎ
なが髪の少女をさがす夏野原
ウルマンの詩読みなほす青野かな

元田亮一

夏野原見渡す限りメガソーラ

さいたま 飯田忠男

メガソーラ覆ひ隠すや夏野原

夏野立つ遮るものは何もなし

さいたま 吉川拓真

炎天下時間も止まる交叉点

一匹の虫と出会ひし大夏野

炎天下ちりちり焦ぐるガードマン

うじやうじやと信号を待つ炎天下

「見て見て見て」と子供が見せる兜虫

炎天の匂ひを連れて家に入る
人を見て人に見られて海水浴

「小半時」と夫は畑へ炎天下

野平美紗子

川崎 鈴木玲子

炎天下重装備して句会へと

シンフォニー指揮棒振つて行く夏野

新幹線苦もなく過ぎる大夏野

喪のネクタイ緩め坂道炎天下

赤銅の肌海水浴の見張り番

炎天のチェンソーの音撥ね返す

夏霞かすかに見ゆる竹生島

富士見坂いまビル群に夏陽射し
見附跡めぐり老舗の夏暖簾

風起ちて夏野の川を見失ふ

下川光子

さいたま 竹澤和子

夏野ゆく大きな背と小さき背

大夏野貴婦人独り佇みし
パラグライダー蹴つて飛び出す大夏野

夏野原掌の石塊を捨てられず

開墾す地平線まで夏野原

炎天や青信号に促され

炎天の波のきらめき木に写す

鴉鳴くビル解体の炎天下

炎天下球児の願ひゲームセット

炎天の沙漠連行にはあらず

伊予 向井章子

夏野原坊主刈りされ模様替へ

沙羅の花見聞録は白きまま

日の出前夏野行き交ふウォーキング

日和見に徹して生きる大夏野

炎天下避けて墓石を磨きけり

覗き見る弁柄格子の内簾

炎天や水族館で寝付く孫

炎天を煽り立つかに火焰山

蓼科や夏鶯の見ぬ容姿

小川洋子

炎天下石狐妖しく揺れてをり

さいたま 北出久美子

山男重き荷背負ひ炎天下
里帰り愛犬はしやく夏野原
えぞりすのきよとんと止まる夏野原
下北の青野に凜と寒立馬

炎天下騒音溶くるハイウエイ
近道の心許無き夏野かな
片蔭や見知らぬ人と足止める
カフェの隅目高見つむる老紳士
大どろや見る眼集むる夏芝居

さいたま 綿貫ひさの

見渡せば天と二分の夏野かな

安倍弘夫

炎天の糸杉燃ゆるかに見ゆ

霜多光代

今昔や戦地変はりて夏野原

炎天の白砂突つ切る赤ふどし

炎天の校庭過ぎる土煙

炎天や白から黒の仮面劇
炎天下鎧着こなす捕手魂

夏野原を口笛吹きつつ渡りたる
朝まだき夏野の花の戦ぎ見ゆ

山道を越えて絶景大夏野

川 口 山岸久美子

夏野原カウベルの音聞こえけり

小駒さち子

大夏野胸に秘めたる恋心

炎天下テニスラリーの音さやか

どこまでも続く青野にただひとり
炎天の大温度計新記録

炎天や流るる黄河金の帯
眺め見ゆ夏二度咲きの紫木蓮

炎天や道の熱気も引き受けて
炎天下手旗信号見て進む

房総の海群青の炎天下

さいたま 藤岡真知子

かくれんぼ早く見つけよ炎天下

川 口 新井のり子

炎天の池幾重にも亀の塔

母の忌の花摘みにゆく青野かな

炎天下かかあ天下の姉が来た

見定めて打ち損なひし西瓜割り

パラソルの影を見ながら銀ぶらす
夏野原乾きを紡ぎ風運ぶ
ここならとあごにマスクの青野かな

見え隠れ帽子の進む夏野原

東京 山中いちい

越谷 阿部幸代

風吹けば秘密を隠す夏野かな

夏野いま風を抱きて草の海

見せばやな蛍の二匹飛び交ふを

青野行く道にハンゲル対馬島

炎天やチョコレートの心地して

炎天の造船ドック動く影

椅子の下犬炎天に舌を出す

炎天下路面電車で行く紙屋町

炎天の帰り道なほ遠きかな

さいたま 緒方みき子

橋渡り休耕田の夏野かな

神戸 井関礼子

うろ覚えの近道隠す夏野かな

炎天もB級なりし峡住居

炎天の水筒泣きかてカランコロン

見晴るかす裏山よりの夏野かな

補助輪を外し見守る濃紫陽花

炎天の奉仕作業も遙かなる

夏野原親には見えぬ秘密基地

青蒿や球児見守り半世紀

高山の花咲く礼文大青野

森下美智枝

東京 岡野順子

炎天下大樹の影から踏み出せぬ

夏野原追ひかけつこの親子かな

炎天下傘と帽子とまだ足りぬ

炎天下時計の秒針止つています

白き雲池塘に映ゆる夏野原

炎天下人待ち顔の親子居て

見晴し台の浅間くつきり梅雨晴間

坐りてもこの炎天の土性骨

炎天や浮き出る錆の歩道橋

東京 柳父はる

炎天下砂場に点々静かなり

横浜 川島典虎

炎天を等間隔にペダル往く

先達の足の早さや夏野原

炎天の正午の道に猫のそり

炎天の石に座れず草に寝転ぶ

夏野道やつとぬけ出て大笑顔

炎天下みんな捨てたい見栄ばかり

風もなし頭真白夏野かな

炎気なり馬も走れば汗一斗

夏休み見るもの聞くもの皆楽し

炎天下ビル解体の重機音

さいたま 武田重子

炎天下大音量のスピーカー

吸ひ込まれさうな気がする夏野原

さいたま 高原和子

炎天下顔を真つ赤に走り込む

夏野行く心細さにずんずんと

青天の広し青野を分け進む

炎天を来て我に返るや水一杯

夏一日見世物小屋の講師師

身がまへて使ひに出るや炎天下

朽ちかけし馬頭観音大夏野

いすみ 平石睦子

一斉に見上ぐる家族大花火

近道のつもりが遠し炎天下

炎天やドクターヘリの重き音

和歌山 嶋田洋子

炎天や又すれ違ふ救急車

靴紐をきつく結んで夏野行く

時刻表びつたりのバス大夏野

見て触り食べて満足早桃園

土用太郎普段見ぬ人見かけたる

ラムネ飲む喉を見つめる三歳児

顔隠す絵日傘の女見たくなり

ストレスを吸ひ取る夏野雲白し

藤 沢 小島喜代子

夏野原風も雲も皆仏

小 浜 松島寛久

飛んで来しボールを隠す青野かな

菩提寺へ手ぶらでぶらり炎天下

深呼吸朝の青野に裾ぬらす

浮き上がる仁王の血管炎天下

炎天下とぼけ顔した陶狸

炎天下葎酒許さず発心寺

炎天や砂漠のらくだ鞍置かず

炎天の参禅の子らに魚板鳴る

炎天や砕くる甲斐の花崗岩

東 京 飯室夏江

すれ違ふリフトの影や大夏野

さいたま 森美枝子

炎天を抜き去る若きアキレス腱

柵に寄る牛の尿の夏の原

炎天やウイスキー工場の静

老犬のけをんと吠ゆる炎天下

休館のロッジを抜けて夏野原

タンカーの沖に貼り付く炎天下

炎天にバット真直に球兎立つ

茜さす富士を遠見の月見草

ごくごくくと蛇口逆さに炎天下
電柱の陰を取り合ふ炎天下
木道を渡る靴音夏野原
夏野原疎水に子等の群がりて
蜚蠊に次の行動見透かされ

さいたま 森 和子

炎天のバス待つベンチ深呼吸
炎天下プラグミ拾ふ由比ヶ浜
炎天のビルのクレイン揺れてをり
夏の野や牛放たれて雲白し
青田風そつと見守る父の背な

さいたま 木村るみ子

炎天に見失ひけり白球を
炎日や飛行機の影見失ふ
炎天下靴先白き無言の葬
誘惑に負けて飛び込む夏野かな
つやつやと揺れ青野行く馬の臀

小林京子

サーファアの大きな弁当炎天下
少年と見えしが少女ソーダ水
ドアノブに電気が走る炎天下
通過する貨車は炎気をふりまきて

後藤綾子

炎天や谿はさまに毀る欲と垢
炎天の四日目の朝は色も無く
炎天に浄めの酒と湯の温み
描きかけの青野に集ふ家族あり
青野来て点睛入るはわが心

草 加 持 永 喜 夫

車線規制に大渋滞の炎天下
ワクチンの画面に見入る夏帽子
テント張る爺早技の炎天下
カメラ見て検温される夏館

和歌山 葛城千世子

朝もやの夏野を駆くる親子馬
朝日浴び甘くさはやか夏野原
炎天の工事現場の作業音
炎天下小学生の声高し
テレビ見の東京五輪夏の夜

さいたま 野村美子

まほろばの揺らり馬の背夏野行く
炎天の銀座マダムの黒の鐘
馬遊ぶ岬の青野続く海
炎天下サッカー少年掠れ声

さいたま 新井孝磨

夏野原絵画の世界切株で

さいたま 塩野久子

さいたま 秋谷信一

炎天の流るる雲と遠き峰
炎天に大きな帽子二人影
草原に大きかけ橋虹を見る

ジャージーの乳房をこする夏野かな
夏野来て見下ろす洋や露天風呂
炎天の浜辺をビキニ埋めにけり
炎天の港レイ持つフラガール

木道を辿る夏野に果て見えず

鈴木藻好

和歌山 高橋満耶子

深呼吸夏野の雷に逃げ場なし
夏野へと山駆け下る子らの声
炎天に人工芝は煌きぬ

餓鬼大将いまは何処に夏野原
梅雨荒るる赤い欄干見え隠れ
暴れ梅雨見る見る土砂を押し流す
炎天下男勝りの川遊び

故郷を出でし青年背に夏野

千坂平通

さいたま 橋爪さなえ

高原に夏野の白馬草を食む
炎天下白球追ひしユニフォーム
炎天下野球部走るグラウンド

炎天の帽子下ろし立ての匂ひ
炎天やうさぎ跳びせし校庭よ
風に乗る命の匂ひ青野原
子と跳ねし赤きリユックや青野原

炎天下鬼の顔なるアスリート

東京 畑宮栄子

樋口元美

理不尽な言ひ訳聞かぬ炎天下
弱点を見透かし攻むる夏の囲碁
長岡の花火見上ぐる三世代

夏の野やりフトの揺れは山の風
富士山へ匍匐前進炎天下
詰め替への名もなき家事よ炎天下
向日葵の迷路出口は見つからず

炎天や田畑を溶かし線路行く

吉川 杉浦理恵

安藤みえこ

空見れば羊泳ぐや夏野原
割れさうにふくらむ蟾や見栄つ張り
炎天や脳はたうたう液状化

8ミリにあなたを見つけ梅雨の星
タレパスの描く夏野や青に青
ひとり身の枕の染みよ虎が雨
今日の事遙か彼方へ青野風

炎天に旧知の家や解体す

決意込め夏野を行かむ朝散歩

夏野原歩けば靴も染りけり

炎天下石地藏口乾きけり

和歌山 南条きわゑ

麦秋や祖父のお謡ひ書見台

大夏野蒸気機関車驀進す

北の国海へ開くる大夏野

畑道は炎天画材店目指す

宮代 関谷多美子

北アルプスを来て炎天に戻る

炎天に吾を止むるスマホかな

夏野原小動物の気配して

炎天行く前も後も人消えて

さいたま 山下ユリ子

炎天に天気予報の雨さがす

友誘ひ早朝に見る蓮の花

うたた寝に氷あづきの夢を見て

夏野揺れ風の姿の見える夕

さいたま 竹内万美

森をはり広がる夏野抜くる空

夏野行き見え隠れする赤リボン

黄帽子が一人で帰る炎天下

炎天下地下に浸み入る樟の影

湯浅 和

子鴉を必死に見守る親鴉

炎天を来て自動ドア開く瞬時

ビル影を探し歩めど炎天下

東京 河原叔子

仮免の車列延延炎天下

指を焼くドライアイスよ炎天下

見当は指尺任せ鮎太し

単線に物見櫓や夏の果て

大阪 遠藤人美

炎天下グラウンド静かなる日曜

ワクチン接種受けて帰路ゆく炎天下

炎気避け樹陰求めて鳩あゆむ

川口 田村福美

広ごりし青野よ山の子の夢よ

炎天も清しワクチン接種終ふ

見込みなき買ふ宝くじ梅雨明けず

白球追ふ球児炎天ものともせず

枚方 寺内洋子

炎天を穿つサイレン頭垂る

雲を追ひ風に追はれて夏野行く

雲海に見果てぬ夢を流しけり

さいたま 横山礼子

息吸ひて息を吐きをり炎天下
いたいけな少女が見えて広島忌
夏の星見てゐる子供見られる子

所 沢 関根千恵

「みいつけた」夏野に深きかくれんぼ
夏野に立つ心は既にハイジなる
仏見る吾見透かされ夏灯

さいたま 奥山粉雪

風は良し青野に向けてテイクオフ
炎天や上昇気流を捉へけり
どこまでも夏野に続く風の道

さいたま 岡田芳春

空爆の悲惨碑拝す炎天下
扇止め陶芸技に見とれるる
零戦の撃墜虚し夏野かな

小川 藤間友二

夏野原その名を知れば友となり
朝虹に未来の夢見て頼ゆるむ
炎天下タオルを首に歩こうか

落合和枝

炎天下世界の友と闘はむ

福田育子

☆

☆

今昔の戦場ヶ原大夏野

大夏野子等の歌声空高く

夏盛り焼けた身体にタトゥー見る

川島夕峰

宵宮に集ふ仲間の笑顔見る

炎天のテニスベンチのにぎやかに

炎天の捕れそうで捕れぬ飛球かな

山川 順

夏野かなSL走る川の風

夏野原飛んだ帽子は今何処に

「現代俳句カレンダー 2022」 販売のご案内

現代俳句カレンダーご注文を受付中です。今年も引き続き多くの会員からのご注文をお待ちしています。

◆**体裁**：B4判の上下二連

◆**価格**：1,200円 / 1冊（定価の2割引）

◆**注文**：下記の通りお願いします。

葉書に3項目を明記する。

①注文者の住所・氏名・連絡先電話番号

②注文冊数

③受取り方法〔発行所で引取・自宅又は指定先に発送〕

葉書の宛先は、

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町 4-10-21

水明俳句会 カレンダー係

注文締切 10月15日(金) お早めにどうぞ!!

◆**備考**：①水明俳句会より下記7名の俳句が載ります。

主宰（短冊揮毫） 網野月を 大村節代

石山かつ子 椎野美代子 大橋廸代 星野和葉

②自宅又は指定先に発送をご希望の場合は、

実費送料をご負担いただきます。

※間違い防止のため、ご注文は葉書でお願いします。葉

書以外の注文はご遠慮ください。

※ご不明の点については、〔総務部 日高道を〕

TEL 048-822-8370 090-2122-1223 へお問合せください。

主 宰 山本鬼之介

総務部長 日高道を

夏季競詠

山本鬼之介

作品評

見覚えの姿涼しき遠会釈

大場順子

夏季競詠の目的と意義

毎年十月は水明全会員による夏季競詠を実施していますが、その目的と意義を理解していない会員が多多いように感じます。そこで、今後各位の出句意欲を更に高めてもらう為に、昨年に続き今年もその骨子を明示します。

〔目的〕競詠は、「大相撲トーナメント」と同様に、「兼題」を「土俵」に見立て、全会員が同じ条件で俳句を競い合う場、即ち年に一度の「水明場所」なのです。廻しを確りと締め、「水明集会員」と「季音会員」とが四つに組んでぶつかり合つてくれることを望んでいます。小兵力士のように、水明集の新人が、奇襲作戦で季音雪欄作家を転がすのを見たいものです。

〔意義〕通常の雑詠作品では比較しにくい技量の差を、兼題によって条件を揃えることで見出し易くなり、全会員が一堂に会して俳句を楽しむことが出来ます。

また、夏季競詠での成績が、水明賞や季音賞の選考過程において、巻頭に加えての重要な評価基準になりますので、その点を留意してください。

街中での一光景である。句の中の人物二人の距離がどのくらいかは、出会った場所の状況や、両人の視力がどの程度かなど、幾つかの条件が関係してくるので微妙であるが、十数分程度かと思う。夏の和服に身を包み、日傘を差した婦人に離れた処から会釈された作者である。遠会釈したひとは、作者が誰であるかが判っていたから会釈したのであるが、会釈を受けた方はどうだろう。「見覚えの」から推察すれば、遠会釈のひとの姿形が脳裏に刻み込まれており、咄嗟に名前が出てこなくても知り人であることは認識したことになり、多すぎこちなかったにせよ会釈を返したことであろう。たったの十一文字から、その場の様子やその後のことなど、場面の展開が想像できて楽しめる俳句である。

炎天や読書と決めし日の奢り

大塚茂子

朝起きた時からその日の酷暑が予想できた。案の定時の経過とともに温度計の数字がぐんぐん上がってゆく。夕餉のための買物も止めにして、今日は家籠もりすることにした。ここ数日用事が立て込んで折角買ったのに読めなかつた本を、一気に読むぞと心を決めたら急に豊かな気持ちになった。金銭

には代えられない心の奢りである。

娶らずに羊追ふ杖夕青野 大橋廸代

使い古した杖を突いて羊を誘導している老羊飼であろう。豊かな青草が茂った放牧場を照らす夕陽と老羊飼。何時の日か名画で見た気がする景色である。「娶らずに」の上五の言葉に、その歳になるまで妻帯することなく孤独に生きてきた羊飼の生の姿と心の内が、充分に描かれている。俳句だからこそ心の描写である。

撫で付けるコールマン髭炎天下 染谷正信

「コールマン髭」とは、短く刈り整えた口髭のことであり、英国出身の俳優「ロナルド・コールマン」のトレードマークの口髭に因んだ名である。太陽がじりじり照りつける炎暑の某日。コールマン髭の苦み走った男が、サマースーツを着て街を歩いている。滴り落ちる汗で、折角のコールマン髭が台無しである。ハンカチで売物の髭の汗を拭いている男が哀れであり、また、滑稽でもある。正信俳句にまた一つ華が咲いた。因みに、ロナルド・コールマンは、トニー・黎明期を代表する人気スターの一人である。一九四七年の「二重生活」で、アカデミー主演男優賞を受賞、「失はれた地平線」「二重生活」「80日間世界一周」など、懐かしい映画に出ていた。

炎天に曝す我が身やレクイエム 網野月を

炎天から身を護る緑蔭や片蔭が全く無い野道を歩いている人物の情景が目に見えなくて重く、重い十字架を背負われ、ゴルゴダの丘へ追い立てられてゆくイエスのように。街の中は勿論、少々辺鄙な所にも飲料の自販機が設置されている現代社会においては、縁遠いことかも知れないが、短時間と言えどもミサ曲が口をついて出るような厳しい炎天なのである。

炎天下水禍の土砂を掻く媼 横山君夫

ここ数年来梅雨時の集中豪雨や台風がもたらす大雨による水害が目立っている。それは、単に河川の氾濫に留まらず、数年前の広島市や、今年の熱海市で発生した山崩れによる土砂災害をも引き起こす過酷で深刻な自然災害である。尤も、熱海市のような人災的な要素のある災害もあるので、なかなか複雑である。

さて、掲句の情景は甚だ悲惨であり心が痛む。永年住んで想い出多い家が浸水してしまっただか、或いは上流から押し寄せた大量の土砂によって家が潰されてしまったのか。一転して晴れわたった空から、容赦なく炎熱の陽射しが降り注ぐ。悲嘆にくれて放心状態の老婆が、黙々と土砂を取り除き、大切な物を探している様子が伝わってくる。テレビ報道を視ての作句かも知れないが、媼への同情の心が確り詠まれている。

村の子のでんぐり返し大夏野 日高道を

町村合併が進み、全国的に「村」が少なくなった現状下において、豊かな自然に恵まれた土地で育った子供の伸びやかな心身の様子が直に伝わってくる俳句である。広々とした夏の野原のでんぐり返しが、その子の心の開放感を見事に活写している。

見解の相違 一息シャーベット 森本早苗

何かの話題で、かなり激しい議論が交わされたのだろうか。互いに歩み寄る気配を見せず、結論が出ぬままに物別れになる公算が大である。とは言え、互いに合意の握手をしたいとの思いもあり、シャーベットを食べて頭を冷やし、一息入れていざ再開の場面を迎えるのかと想像する。蓋を開ければ、たわい無い夫婦の口喧嘩かも知れない。

脱サラや炎天のなか名刺置く 新 暦文

名の通った会社を辞めて自らが経営する仕事を始めた人。顧客獲得のために炎昼を厭わず、新しい名刺を持って訪問セールスをしている。訪問先の相手が名刺を受け取ってくればよいが、邪険に扱われるところも多い。会社の看板に護られていたサラリーマンの有難みが骨身に沁みる。「名刺置

く」に、脱サラの哀感が滲み出ている。

全身を見透かされさう絹のわたし 矢作水尾

着ている人よりも、見ている人の方が涼しさを感じるような絹の着物である。晴れの舞台に立つ思いで着たものの何かしっくりせず落ち着かない。道行く人々に裸身を視られているような気分である。この句の軽妙なタッチが好ましい。

いきいきと牛の反芻夏野原 石山かつ子

夏野に放牧されている牛が夏草を食い、偶蹄類の特徴である反芻作用を繰り返している。それを観察している人間も知らず識らず自分も反芻している気持になる。「いきいきと」が、牛の生態をよく捉えている。

炎天下 鞆ふじの息で女坂 石井喜恵

勾配の緩い女坂であっても、炎天下となればかなりきつい。そこを上ってゆく人の状態を如何に表すかが、簡単そうで難しい。「鞆の息」が、臨場感を伴って簡潔にしかも正確にその様子を言い表している。

夏野原出土の美女は無国籍 大村節代

「出土」の意味は、「古代の遺物などが土の中から出てくること」であるから、掲句のまともな解釈は、「遺跡調査によって出土した埴輪」ということになりそうだが、それではまともすぎて面白くない。多分に事件性を帯びた出土品ではないかと推量する。殺人事件↓発掘↓骨格鑑定↓美女↓捜査↓無国籍。ちと考えすぎだろうか。

金盃ほどの夕陽や夏野原 原田秀子

むかし洗濯や行水に使った金属製の金盃を想い出す。この句では、金盃を夕陽の大きさの形容に用いているが、正確には伝わってこない。しかし、何となく夏野を染めている大きな夕陽という意味に取れる。作者の脳裏に、「金盃＝大きい」というイメージがあるのだろうか。

はてしなき旅のはじまる夏野かな 永野史代

これまでの人生で体験した旅、理想として思い描いた旅。作者の頭の中には、沢山の旅が渦巻いている。旅そのものには起点があり終点があるのだが、夏野には終点のない旅を生み出す魔力が潜んでいる。他の季節には無い野の魅力である。

火の鳥の羽音空耳炎天下 正木萬蝶

掲句の「火の鳥」が、ストラヴィンスキーのバレエ曲によ

るものか、手塚治虫の代表作の一つでライフワークとなった作品のものかは不明であるが、何れにしても胸をわくわくさせる架空の鳥である。炎天下の下で脳の働きが鈍っている時、過去の記憶の中にあつた火の鳥が、脳裏を掠めたのかも知れない。非現実的な発想が楽しい。

品格を忘るる女神炎天下 野田静香

本句の「品格」は、「気品」と解するべきであろう。それに対し「女神」はどうか。女神の像又は佐保姫・竜田姫のような想像上の女神のことなのか。筆者としては、そのどちらでもなく、この女神は容姿端麗の女性を意味しているのではないかとの思いに至った。炎天下の外出は、きちっと身なりを整えた女性には過酷であり、気品を保つゆとりなど無いと思うからである。

夏野原まつ直ぐ歩くむつかしさ 椎野美代子

若年の頃ならともかく、加齢とともに歩行に多少とも支障が現れる。舗装された場所ならともかく、凹凸のある場所だと真つ直ぐ歩くことは難しい。夏野で、前方の目標物に向かって歩いてきたのに、気がついたら何時の間にか弧を描くように曲がって歩いていってがっかりした。

炎天に生氣吸はるる花時計 柚木治子

花時計は、文字盤に花を美しく植え込んだ大きな時計で、公園や駅前広場など、人の多く集まる場所に設けられている。主役となる花々には、当然のこと枯らさないように水遣りを行っているが、真夏の炎天下ではかなり厳しい。まさに中七の措辞通り、ぐったりした花の様子が見えてくる。

炎天を仰ぐ眉毛に重さあり 鈴木康世

普段は意識することのない眉毛であるが、炎天という過酷な条件下では鬱陶しさを感じ、それが眉毛の重さに繋がったのであろう。

パラグライダー大鷹になる大夏野 洪谷きいち

パラグライダーはスカイスポーツの一種で、大きな楕円翼によって二〜三時間の在空中と二千メートル程度までの上昇が可能とのこと。まさに大夏野を目がけて降下する大鷹の勇姿である。

秃げ上がる出世の額や炎天下 小倉倭子

男にとって、名誉であると同時になんとも過酷な俳句である。さて、出世出来なかった男はどうなるのだろうか。

夕映えの火の見櫓や遠郭公 保坂翔太

消防署の望楼は、遠い想い出となり、火の見櫓は、単なる飾り物としてたまに町の中で見掛ける存在となった。そんな火の見櫓に夕陽が当たり、優美な景を成している。遠くから聞こえる郭公の声が郷愁をそそる。

結論は元氣一番夏野行く 越田栄子

日々の暮しで思い通りにゆかぬことや、反省すること、嫌なことなどいろいろあるが、くよくよ考えていてもしょうがない。気晴らしに夏野を歩き、汗をいっぱいいかいて元氣を取り戻す。

昭和遠しや爆撃知らぬ大夏野 鈴木和子

夏の太陽をいっぱい浴びて輝く野原を歩き、つくづく平和を実感している。もしかしたら、これも彼の大戦で戦禍があったかもしれないが、今は全くその痕跡が無い。

炎天や先行く夫を見失ふ 松井由紀子

炎天下の街で、以前のように夫と一緒に歩いているような錯覚にとらわれた。いつも数歩後ろを歩いていた自分。ふと目を上げると、前は見知らぬ人ばかりで、夫の姿は無かった。

インターネット句会のご案内

10月より下記の要領で「インターネット句会」を始めます。
多数の皆様のご参加を歓迎いたします。

既にホームページでテスト運転を始めています。[インターネット句会] から入ってみてください。

- 【参加資格】** 問いません。水明会員以外の方も歓迎します。
【投句方法】 ホームページのお問い合わせフォームより投句。
(スマホは✉MAILのクリックから。
【インターネット句会〇月分】として投句ください。

【投句数】 2句

【投句料】 無料

【兼題】 当季雑詠とします。

【締め切り】 毎月20日（間に合わなかった句は次月の句とします。）

【清記】 毎月22日にホームページに掲載します。

【選句】 アップされた清記から3句選(内一句を特選)と選評。
(選評は一行程度に簡略化してください。)

《記入例》

特選:No.20 季語の斡旋が秀逸。○○○○の言葉の妙。

No.12 ○○○○○○に季節感がよく表現されている。

No.30 破調が効いている。季語との距離感が良い。

【選句締切】 毎月25日

【選句結果】 毎月末までに選句結果と選評をホームページに掲載します。

※公序良俗に反する句は掲載出来ません。

事業部

水琴窟

(水明集八月号鑑賞)

池田雅夫

新緑やそろりそろりとかづら橋

鈴木玲子

祖谷のかづら橋に限らず、山の奥深い谷は橋を架けることができず、蔓を束ねて「かづら橋」を架けて渡る。あまりにも高いかづら橋に「そろりそろり」と渡るのが精一杯。新緑の艶やかな美しさも目に入らず、一歩一歩進む姿がみえる。

呵呵と笑ふ羅漢や片肌脱ぎ

松島寛久

羅漢は修行僧の最高の地位で、いつさいの煩惱を断ち、自力で悟りを開いた人のこと。逞しい上半身をあらわにして立っている姿を思い浮かべる。まさに「片肌脱ぎ」である。大きく開いた口は「呵呵と笑ふ」の表現にぴったり。痛快。

紀ノ川をまたぎて千の鯉職

嶋田洋子

「紀ノ川」は和歌山県北部を流れ、その上流部を奈良県の吉野川という。五月の端午の節句のころ、家々で不要になった鯉職を集めて、川の上空を泳がせるのである。大きな紀ノ川の上空を大量の鯉職が泳いでいて一大風物詩といえる。

葉桜の上葉を照らす入日影

新井のり子

満開の桜もあつという間に散って「葉桜」になってしまった。みずみずしい葉桜の樹の天辺にのこる夕日影。スポットライトを浴びているような情景に思わず頷いてしまった。

春暑し手持無沙汰の大欠伸

水野興二

春のうちに感じる夏の気配。「夏近し」「夏隣る」などともいうが、「春暑し」と大胆に言い切っているところに惹かれる。春の深まるころのもの憂さもあり、手持ち無沙汰に欠伸も出ようというもの。「ははん」と納得してしまった。

薄味に慣れて退院春景色

檜鼻ことは

長い入院生活に、その食事の薄い味に慣れてしまったのだ。ようやく回復して退院することができた。久しぶりの町はすっかり春の景色に変わっていた。病気が完治した晴ればれしい気持ちと春の景色の明るさが重なり合っている。

菜種梅雨水の膨らむ丸木橋

湯浅和

「菜種梅雨」は油菜の実が熟すころに降り続く雨のこと。実となった油菜は刈り取られ干しあげられ、やがて打たれて実が搾られる。梅雨どきのように降り続く雨に川が増水し、丸木橋さえも膨らんでいる。「水の膨らむ」の措辞に感服。

川縁の水車の廻る麦の秋

木村るみ子

初夏、麦は黄色に熟す。この時期を麦秋（むぎあき）と呼ぶ。麦とは対照的に、田んぼでは水を張って苗代の準備を始める。川から水を上げるために水車が力強く廻っている。実っている麦ではなく、時候として捉えたところに共感する。

一 献を観音様へ三社祭

綿貫ひさの

東京浅草神社の祭礼で、古く三社権現と称したのが由来で「三社祭」というそう。重さ一トン以上の大神輿三体が三手に分かれて浅草の町を巡る。各町会から百体ちかくの輿が繰り出される。その振舞で観音様に一献さしあげている。

通学路みかんの花の匂ふ頃

加藤ナヲ子

童謡「みかんの花咲くころ」を口遊みたくなる句に共感した。六月ごろ、濃緑の葉の間に白い小さな花を咲かせる「みかん」。海に面した急坂のみかん畑の道を学童は元気に通っている。海のない埼玉県では風布みかんが知られている。

手かげんのなき王手飛車子供の日

高橋満耶子

五月の大型連休もコロナ禍のため行楽に出かけられない。やむを得ず家で過ごすことになった。話題の将棋を子供と楽しむことにした。勝負の世界に手加減はない。辛うじて。

黙約は秋風ふきて消えゆけり

関根千恵

「黙約」は、文書などをとりかわさず暗黙のうちの約束。暗黙の了解である。秋の風に、移ろいゆくあわれを思っているうちに約束ごとを忘れてしまった。ことの重大さを感じさせないのは「消えゆけり」とさりりと言い切っているからか。

夏に入る棚田に映る水面の月

梅津幸代

千枚田でなくても山地の棚田の風景に魅了される。立夏のころは満々と水を張って田を落ち着かせ、苗代、田植の時期を待つ。「棚田に映る月」が歩きゆくたびに次の棚田へと移ってゆく。そんな情報が「水面」のところではしい。

月山の雫一滴さくらんぼ

福田育子

出羽三山の一つ、月山を源に流れる寒河江川。その一帯は「さくらんぼ」の名産地。「佐藤錦」のふるさとである。月山の雪解水をたっぷりと含んだ結晶の粒の「さくらんぼ」。日本一の称号はゆるがない。「雫一滴」の措辞に食指が動く。

単衣もの透けたる腕を隠しをり

落合和枝

綿入れや裏地のついた袷などに対して、裏地のないのが単衣物。うすい生地で腕が透けて見えるのか、その腕の白さが憚られる。「隠しをり」に女性の心情が映しだされている。

網野月を選

山紫集

日盛の内藤新宿閨魔堂

瀬戸雄二郎

迷ひなく絵筆走らせ日の盛り

町野広子

日盛や竿のTシャツまだ遊ぶ

菅原真理

角打ちと言ふオアシスや日の盛

森本早苗

日盛りの棚田に指を入れてみる

保坂翔太

黙々と掻きだす土砂や日の盛り

高橋満耶子

一人づつ子を抱く夫婦日の盛

曲淵徹雄

日盛りや厨で薬味刻む音

武田重子

夫宛の女文字憂し日の盛

正木萬葉

日盛りや勝ち馬オッズ役立たず

鈴木藻好

日盛や影濃き街の静かなる

松井由紀子

日盛りの匂ひとけむり野次の群

青木鶴城

日盛や老樹の肌の薄じめり

丸山マシミ

日盛りの犬の喧嘩を仲裁す

高島寛治

日盛の野球テレビで眺めをり

宮崎紫水

写経する文字の滲みや日の盛

日高道を

森林の深さ暗さや日の盛

宮崎チアキ

—以上特選

日盛や睡魔払ふはバイク便	村杉清吉	日盛をイオンで過ごす三千歩	安倍弘夫
日盛りに玩具ゆらめく庭プール	本橋稀香	古代花堅く窄めて日の盛る	新井孝磨
日盛や動く歩道を急ぎ足	森 和子	日の盛控へ投手がブルペンへ	荒井俱子
下校告ぐチャイム韻引く日の盛り	森川義子	日盛のスフレ焼く香に整理券	石田慶子
日盛や庭師ファン付き作業服	森下美智枝	薄荷糖を含みつつ行く日の盛り	石川理恵
歩行器の吾が影小さき日の盛り	山岸弘子	畑のものの田のものを萎ゆる日の盛り	池田雅夫
教会のガラス絵写る日の盛り	山田美佐尾	日盛を野鳥憩ふもひとしきり	井関礼子
日の盛あたりを祓ふ磨崖仏	湯浅 和	日盛りに家組まれゆく西日中	伊藤敦子
日盛や時止まりたるやうな街	横山君夫	日盛りやコンビナートは海に向く	井上燈女
日盛に腿ひんやりと寝る吾子や	横山礼子	日盛りや柱時計の刻む音	井上玲子
日盛や山の手線は三周目	新 曆文	日盛や砂場に残るミニシャベル	井口俊晴
日盛の切株の椅子木登りの夢	阿部幸代	日盛や直立不動草も木も	上戸千津子

日盛りの近江古民家陰遣し	宇田白鷺	レトロなる茶房でしばし日の盛り	熊倉千重子
人影は半透明に日の盛り	内田恵子	日盛りや蹲ひの底魚ねむる	河野はるみ
日の盛り兵庫横丁や神楽坂	梅澤輝翠	日盛やドアの開閉やめられぬ	小駒さち子
日盛の街一瞬にモノクローム	梅澤佐江	日盛の憂さを吐き出す室外機	越田栄子
白旗の少女の笑窪日の盛	大塚茂子	城下町帯をきりりと日の盛	後藤綾子
狛犬の口に日盛隠れるし	大場順子	地下街を縫ふ万歩計日の盛	近藤徹平
日盛りの秒針を巻きその音刻む	岡野順子	ラジコンに火花を散らす日の盛	斎藤みよ
日盛や森閑に轟く垂水	加藤でん治	日盛りのひそけさ人と会はぬ街	佐々木典子
日盛の堤防工事何のその	川島典虎	ゼブラゾーン歪んで見ゆる日の盛り	笹本啓子
鳥獣とて木陰に潜む日の盛り	河原叔子	日盛や睡魔こつそり忍び足	佐藤克之
日盛の真つ赤に燃ゆる警視庁	神田治江	日盛や気付けば一人保健室	渋谷さいち
日の盛ドア越しに見ゆカレーフェス	木村るみ子	大樟の影に吾の影日の盛り	下川光子

日盛にストップウォッチアスリート	菅原卓郎	遮断機の涸れたる音や日の盛り	飛永 鼓
喪衣の母にお手取られし日盛や	杉浦理恵	日の盛出航待ちの離島便	外村紀子
突き抜ける空外出怯む日の盛	鈴木和子	コロナより日盛避けて自粛せり	仲田利子
銅像に水滴のあり日の盛	鈴木玲子	剪定の腕も鈍れり日の盛	南條さわゑ
日盛りや増減怪し化け地蔵	諏訪サヨ子	日盛や正午を唄ふ鳩時計	西幅公子
日盛や奥村土牛館尋ぬ	関谷多美子	日盛りや無言無音の峡の町	野口和子
寝転んで地獄の絵本日の盛	染谷正信	日盛の雑踏に消ゆ救急車	野田静香
日盛や巖壁迫る舟下り	反町 修	ブルーベリー採る手のたのし日の盛り	野平美紗子
アスリート日焼けの顔も大人びて	田中章嘉	圧倒の仏が浦の日の盛	野村美子
日の盛真直ぐに伸びる木曾檜	千坂平通	読経のもるる尼寺日の盛り	橋本京子
子らも風もなりをひそめし日の盛り	寺内洋子	活気づく孤独自販機日の盛	原田秀子
日盛や木陰に長き犬の舌	鳥羽和風	日盛りや人気なき街猫一匹	樋口元美

日盛りを巨体ゆらして丁髷来

福田千春

日盛や軍国少女の軍艦マーチ

藤澤喜久

日盛りの水琴窟の奏でし詩^な

古池恵里子

山紫集作品評 網野月を

「雨蛙」は、実は類想、類句が多くありましたが、今回の「日盛」は句のイメージが多岐にわたったと思います。出題の難しさを感じました。また「日盛」「日の盛」は一般的には送り仮名は不要であろうかと思われれます。

黙々と掻きだす土砂や日の盛り

高橋満耶子

被災地、熱海のことであろうと解釈しました。時事の句は俳句では馴染まないであろうという見解もあろうかと思えます。が、広島忌、長崎忌、そして近ごろでは東日本大震災の追悼句があります。上五中七の「黙々と掻きだす土砂や」はよくも言っているのけたと思うのです。身近な方がおられたのかも知れませんが、またはテレビで視聴されたのかも知れませんが。上五中七で人の気持ちは深く留まった句となりました。

日盛りや厨で薬味刻む音

武田重子

基本形の俳句です。実は一席に推そうかと思ったところが、惜しいかな、「……で……」が散文的ですし、また音韻も宜しくない。「厨に薬味」もしくは「厨の薬味」であったならば、文句なく一席であったと思われるます。

日盛りや勝ち馬オツズ役立たず

鈴木藻好

上位二句と同様に、季語と句意の距離感が絶妙です。原句は意表をついている句意と言っても良いかも知れません。離し過ぎは崖から落ちてしまうのですが、表現はぎりぎりまで崖の端まで迫りたいのです。「理由なき反抗」のチキンレースなのです。

日盛りの句ひとけむり野次の群

青木鶴城

火事は、俳句では冬の季感ですが、原句は「日盛」で詠んでいます。右掲句三句とは真逆に、表現の距離感を持たせながら、上五の季語の延長線上にある句作りです。この場合、冬の季感の逆転に効果があったということでしょう。暑苦しいまでの景が見えて来るようです。

日盛りの犬の喧嘩を仲裁す

高島寛治

座五の「仲裁す」は作者の行動でしようか。飼主同士のリールの引っ張り合いがあったのでしょうか。「日盛」の本意を倍増しているようです。

写経する文字の滲みや日の盛

日高道を

滲みの理由（わけ）を知りたいところです。この理由の部分にこそ読者の想像が広がる場所なのです。物理的には、墨の磨り具合が甘かったのか、用紙に湿気があるのか、などなどですが、こはやはり、筆を止めて滲みが出てしまったのか、と解したいところです。筆の運びに戸惑いや躊躇があったと解した方が、句意の深まる気がします。夏は安居の季でもあり、悟りへの道のりの険しさを暗示していると読解しました。

日盛の内藤新宿閻魔堂

瀬戸雄二郎

霞関山本覚院大宗寺の閻魔堂のことでしょう。閻魔像の右手側には奪衣婆像も安置されていて、都内最大の閻魔像ということですね。この閻魔さま、何せ「日盛」がびったりと似合います。地獄の釜か、灼熱地獄か分かりませんが、景を見て季語を斡旋したのではなくて、兼題から中七座五を引き出したように考えられます。そしてその景が寸分違わないところに嵌まっています。

迷ひなく絵筆走らせ日の盛り

町野広子

「迷ひ」があるのです。だから消そうとするのです。「日の盛り」に一瞬の出来事なのです。絵筆を執ることで雑念を消そうとする健気な心情がうかがえるのです。……とここ迄分析して作者を開ければ、句の解釈が真逆であることに気が付きました。俳句の鑑賞は難しいものです。「迷ひなく」が真

実迷いのないことに思い至るのです。中七で一度切つて、座五の「日の盛り」を配合しているところからも「迷ひなく」が実存であることの証があると考えられます。

日盛や竿のTシャツまだ遊ぶ

菅原真理

洗濯物の景でしょう。斬新な叙法で洗濯物を詠みながら、上五の季語「日盛」の本意を利かせています。ちょうど正午頃から午後二時、三時ころまでを言うのですから、洗濯物も取り入れ時でありましょう。風があつて、Tシャツが戦いでいる様が目に見えるようですね。

角打ちと言ふオアシスや日の盛

森本早苗

「角打ち」の語彙が活きています。この語感から確かな景が想出されます。嘗ての酒肆の雰囲気のまま言い当てるような「角打ち」は、まだ存在し続けているのかどうかは、筆者には証左はありませんが、言葉があり景が結ばれる以上は文学としての真に他なりません。実態を直視することが基本の俳句にあつても、言葉で創出する以上は、生きている言葉に拠つて俳句も現代に生きているのだらうと思考します。今ならイトインでしょうか、味気ないですね。

日盛りの棚田に指を入れてみる

保坂翔太

刈敷が腐つていわゆる田水沸く様を呈すると、「指を入れてみ」たくなるものです。散文的でもあり、切れの無い一句仕立ての作法が、実は苦吟の果てに行き着いた形なのでありましようが、いとも簡単に創出されたように感じられ、「指を入れ」ることが自然の動作のように感じさせてくれます。

大村節代 選

鼓
笛
集

ひと言が身内貫く夜の雷
山峡に蟬鳴き込めて川吃る
貨車つなぐ音の余韻の爽涼と

神田治江

蟹股も阿呆もゐるや踊の輪
新妻や踊りはにかむ薬指
御用邸禁獵なんぞ蟬しぐれ

新 曆文

ひぐらしや厨に人の気配して
鳴き止んで気付くひぐらし夕支度
ひぐらしや一人暮しも三年目

渋谷きいち

これぞ日本桜とビルと隅田川
風渡り稲葉の揺るる地平線
日溜りにふはりと落ちし桐一葉

西幅公子

お茶席の作法知らねど木槿好き
底紅の紅独り占め花妖精
車椅子凸凹道に木槿垣

梅澤輝翠

虫の声聴きながら乗る体重計
秋の草ブルーの花だけ残しをり
秋澄めり流れる雲の遠き峰

塩野久子

真剣のごとき秋雷羅生門
禁断の月に鎮もる銀閣寺
田園に風神も来て秋の雷

新井孝麿

はらはらと山なす雲やかき氷
眼差しを隠してほしきサンガラス
待つことに慣れて梅酒の瓶回す

山中いちい

汗の子や顔いつぱいの大きな目
嘘少しまぜる問診沙羅の花
生身魂まあるくまるくなりにけり

檜鼻ことは

秋めくや朱色褪せたる仁王像

秋風鈴転職告げしメール音

秋の雲鳥居構へる登山口

鬼灯も鳴らせぬ不器用喜寿となる

雑踏のなかの孤独や秋立ちぬ

おもむろにマスク外して盆の僧

雲の峰野ごころ満たす魔神かな

神楽坂涼し露地裏石畳

雲海の富士に安堵の帰国かな

国道の色とりどりの立葵

一列に葵咲く庭祖父の家

雑草に負けぬ強さよ小判草

垣越しに道問ふ者と薔薇談義

子規庵の寝転びて見る糸瓜かな

ご先祖のハッパあれこれ盆用意

嬉嬉として吾子の手伝ひ水を打つ

早朝の収穫済みぬ夏畑

独り居に西瓜半分隣家より

村杉清吉

主亡き哀れロザリオ長崎忌
大文字北野巡りて金閣寺
法華経を後生大事に天の川

寺内洋子

夏の空池に映りて魚が飲む
中空に虹のかげらの浮かびをり
猫二匹のそれぞれの窓夕焼空

安倍弘夫

余所ゆきをしまひしままに更衣
庭一面のみどり座卓に夏座敷
梱包の二重に里の大西瓜

樋口元美

にいにい蟬帽子に乗つて茶の間まで
空蟬の背なの切れこみ一文字
鷺草の一番花は五輪の日

綿貫ひさの

八月や県内在住と他県ナンバー
八月や利那と感動世のすべて
立秋に励ます友や永久に行く

岡田宣子

涙する盆まねきなるファンタジー
汗にじむ恐れし日々よ姪死せり
妹よりの季節の便り梨の箱

佐藤克之

湯浅 和

鈴木玲子

榊原聰子

南條さわゑ

鈴木和子

鼓笛集作品評

大村節代

山峡に蟬鳴き込めて川吃る

神田治江

山峡には人影もなく、ただ蟬が鳴きたてている。時雨のように、絶え間なく鳴く蟬の声に、川の音も遮られる。それを「川吃る」の下語の表現が新しい。但し、吃る、座頭、聾啞等の言葉は、人間に用いると差別語と近年言われるようなので、注意が必要かと思う。

蟹股も阿呆もゐるや踊の輪

新曆文

「踊る阿呆に見る阿呆」、さて、作者はどちらなのだろう。きつと踊らにや損々と、蟹股で、飛入り参加されたのでは。今年はコロナで、あちこちの盆踊りや色々な催しが、中止となつてしまった。来年は、人類がコロナを封じ込めて、祖霊を慰める盆踊りが、平凡な日常が戻ると良いですね。

鼓笛集巻頭（九月号）

私の好きな一句（自句自解）

本橋稀香

姉となる幼と仰ぐ遠花火

第二子出産の為一才十カ月の孫娘を預かりました。いつも母親と遊びに来て慣れているはずなのに、「ママは」と不安気でした。公園や買物に連れ出し、夕飯も風呂も済ませ寝かせるばかりになった頃ボンボンと打揚げ花火の音が聞こえてきました。市の花火大会の晩でした。

よく見える窓辺に孫を抱き上げると、「キレイねー」と喜びました。私には花火が滲んで見えました。

ひぐらしか厨に人の気配して

渋谷きいち

朝早く厨から、トントンと野菜を切る音がして、やがて味噌汁の匂がしてくる。何とも平凡だが幸せの一齣である。ところが、二句目、三句目により、一句目は本当に気配だけで作者の願望だと分かる。三句一体として詠まれていて、三句を読まないと作者の真の意が伝わらない。自炊も大変だろうが、上手になられたのでは。

俳誌望見 梅澤佐江

『槐』 創刊30周年記念号（令和三年七月号） 通巻361号

主宰 高橋将夫 発行所 大阪府大阪市

平成三年七月、岡井省二が守口で創刊。師系加藤楸郎、森澄雄。「俳句は精神の風景、存在の詩である」を基本理念として、曼荼羅ルネサンスを展開。（月刊）

『槐』（創刊三十周年記念作品（全員対象）より）
主宰詠 一〇句より

一切は種一粒の中にあり
この御句は仏教（浄土宗）の教えに通じる。一つの個体は全体の中にあり、個体の中に又全体があり、個体と全体とは互いに即していると考える。即ち、一つの種から芽が出て木に育ち、花を付け、実り、又種となり、是を繰り返して行く。一つの種には是等一切が含まれているのである。一滴からの水の循環も然り。壮大な宇宙観と精神性の奥深さ。

箱庭の空に私の目玉あり
底の浅い箱に土や砂を盛り、草木や小木、橋や船、人形等を配し山水を模して鑑賞する。江戸時代より楽しまれて来た箱庭。是を恰もガリヴァーのように覗き込む作者の顔、即ち目玉のある位置は視点を変えると箱庭の方からは空となる。物事は多角的な視点で捉える事が大切とし唆している。

藻の花の川と言えば清流柿田川がすぐ浮かぶ。数千年前の富士山の噴火で流出した溶岩の中を三〇年近い年月を経て地

上に湧き出た伏流水が水源となる柿田川、三島梅花藻の可憐な白い花が澄んだ川底に揺れ、其の透明感に圧倒される。この川には本質の伴わない虚飾は一切無いのである。丸で浅はかな人間が見透かされているようである。

特集Ⅱ 創刊三十周年記念作品（槐安集同人）

槐の木言祝ぐやうに天の鷹
藤田美耶子
凜りと鷹渡りたる空の青
寺田すず江
採る種の軽さ命の重みかな
前田美恵子

特集Ⅱ 創刊三十周年記念作品（槐市集同人）
きらきらと帽子躲せり夏の蝶
阿部さちよ
残菊の束ねられし匂ひつたつ
出利葉孝
アルプスをひと跨ぎする秋の虹
河添久子

特集Ⅱ 創刊三十周年記念作品（誌友）
すでに無き星の光も天の川
小藤博之
一つづつ命の音か誘蛾灯
藤井康弘

『槐賞』第三十回受賞者 三木 亨
扇風機わかれ話に首を振る
花びらの総意で落ちる寒椿
かいつぶり発条使ひ切れれば浮く
白鳥座地球かすめる翼の影

「槐」創刊三十周年記念特集が生まれ、特集Ⅰ「槐」創刊三十周年に寄せて、特集Ⅱ「槐」創刊三十周年記念作品、特集Ⅲ「槐」創刊三十周年記念文集、特集Ⅳ 俳句と心（主宰）、特集Ⅴ 岡井省二・人と作品（主宰）、特集Ⅵ 季語論（主宰）、特集Ⅶ 槐賞受賞者一覽、特集Ⅷ 巻頭句一覽、特集Ⅷ「槐」総目次等々。創刊三十周年、まことにおめでとございます。重厚な内容で読み応えがあり、大いに学ばせて頂きました。

句集喝采

近藤徹平

◆遠藤若狭男「若狭」

角川文化振興財団

著者略歴 昭和二十二年福井県敦賀市生。同五十八年鷹羽狩行主宰「狩」入会、毎日俳壇賞受賞、平成二十六年「狩」退会。同二十七年「若狭」創刊主宰。『神話』等五句集既刊。同三十年逝去。

巻末に歌人で「若狭」編集長を勤めた著者の伴侶大谷和子氏が、本句集は著者が生前着手していた第六句集「若狭」草稿に、既発表句及び未発表句を追加して編集したと記す。

雪晴のこの道ゆけば若狭なる

秋を深めて若狭路の海の紺

ふるさとは歩くがたのし草ひばり

麦秋やはるかに日本海の青

俳号を若狭男と名乗り、主宰創刊誌を「若狭」、最後の句集名も「若狭」としたのは限りなき愛郷の念によると思う。

わが死後のわれかも知れず秋の風

青き踏むときをり死後のこと思ひ

歌人の愛妻を編集長にして「若狭」を創刊したのは、限りある人生を生き切る覚悟の夫婦愛の現われであったと思う。

地獄草紙こそ見たくなる修司の思

句集に掲載の著者の随筆には、高校一年の時中村草田男の入选、高校二年の時秋元不死男の秀逸、高校三年の時山口誓子の特選、寺山修司の「高校生五人の俳人」の選に入ったと記す。十分に生き切った人生であったと深甚なる敬意を表す。

◆樋口保「雪解村」

飯塚書店

著者略歴 昭和二十四年長野県飯山市生。平成四年「橘」入会、松本旭に師事、同十九年句集「玉蘭」刊行、同二十七年「星嶺」無鑑査同人、山咲一星に師事。現住所埼玉県上尾市。

山咲「星嶺」主宰は序で、著者が出生地の縁で「星嶺」に参加したが、豪雪地帯が育む「忍」が作品に滲み出ると記す。

冬ざれの風音が蹤く一茶道

故郷は今朝三尺の軒氷柱

晴きつて満つる稲の香おらが村

生国を遠くに住みて根深汁

風音の揺さぶる小さき雪解村

天高し寄る家もなき本籍地

ふる里の訛麻釜あがまに冬菜茹で

「星嶺」に活躍の場を得て著者の故郷の句が並ぶ。第一句、著者の故郷は一茶と同じ。第三句は一茶の「おらが春」から第六句、筆者も故郷の生家を既に引き払ったが、同じ体験の読者も多いであろう。第七句、麻釜は野沢温泉の源泉の一つで、住民が日常野菜・山菜を茹で掃除もする生活の場。もはや帰る積りはないが聴いてもらいたい故郷自慢と拝察した。

柿若葉吾れに伸び代まだあるぞ

宇宙へと広がる青き今朝の春

他方で「橘」では、なお一層意気軒高に活躍と拝察した。

水明例会

第一例会（浦和）

茂木 和子
延昭 報

振り仰ぐ空は真青に原爆忌
鬼灯にはほづき色の日の暮るる
鈴を振る確かな歩幅秋遍路
鬼灯やゆくりなく鳴り驚きぬ
振り塩の魔法をかけて鮎焼けり
葛かづら振り時計の教授室
誰にでも尾を振る小犬草紅葉

——以上特選——

振り時計の遅れがちなる残暑かな
造作なく鬼灯鳴らすをさな妻
鬼灯を鳴らす少女の夢多し
喪ごころや供花に添へたる鬼灯の朱
想うても男は鬼灯鳴らせない
もんでもんで裂けし鬼灯飽きもせず
鬼灯や構へ古りたる長屋門

順子
マスミ
節代
治子
延昭
喜恵

由起子
はるみ
チアキ
喜恵
延昭
和葉
マスミ

第二例会（東京本所）

山中みどり
太田絹映 報

鬼灯と埴輪を画布にまづ素描
空振りも数へよゴルフ体育の日
調弦の音又の振動涼新た
盆踊天に振り上げ地を祓ふ
明日の振袖衣桁にかかる良夜かな
鬼灯売り歌舞伎役者に似ていなせ
炎昼や振り時計の間延びして

日盛りを遅し遅しとバスを待つ
何事も最初の一步雲の峰
小さき碑の木歩癒すや秋の蟬
初秋や歩道橋から望む街
秋浅しいたづらな目が好きでした
はにかみの笑顔脳裡に秋初め
闇深し樹海の空の初秋かな
初秋のかぐはしき雨傘打てり

節代
徹平
理恵
稀香
順子
治子
和子

竺仙
敏江
峰雄
いちい
鶴城
玲子
昌弘

第三例会（東京）

五明 昇
曲淵 徹雄 報

秋残暑そぞろ歩きの湯屋帰り
初秋や果つる事無き架空旅
新聞紙ほどけ胡桃の香り立つ
饒舌な海猫初秋のすみだ川
甕覗の揃ひ鉢巻秋祭

初秋の峡の村里風鳴れり
点眼の日課となりし秋はじめ
秋浅し高きに見ゆる細き雲
初秋や自家製パンの柔らかし
キーを打つ音の軽さや秋はじめ
句の友の歩みを停め散る木樅
秋の昼ステンンドグラス越しに雨
丁度良き二人の歩調秋の虹
卓球台に飛び散る選手玉の汗

——以上特選——

昌弘
陽子
みどり
順子
鶴城
いちい
峰雄
敏江
竺仙
玲子
以上特選



古里に遺る畦道夏薊

日当りの畔はら一叢の夏薊

目を癒す篋りの庭の夏薊

俊寛の化身か鳥の夏薊

サーカスの去りし杭跡夏薊

夏座敷手強き妻の貝の口

掘割に鯉の鼻出す油照

向日葵の成績順に並びをり

夏薊少女頬紅まだ知らず

天を衝く甲斐の山脈秋立ちぬ

夏薊林の雨に衣を濡らす

夏薊棘は防御か攻撃か

約束を違へて滲む盆の月

高原の雲ゆく速さ夏薊

秋暑し寺領に晒す古瓦

夏薊鬼女伝説の遺る里

第四例会 (浦和)

語り部の声の掠れや原爆忌

朝餉終へ金魚と長き日曜日

金魚田にアカペラ聞かす繋ぎ服

火褌のただならぬ赤原爆忌

水筒の水の重さよ原爆忌

金魚屋に銀行員の来て長居

大場 雅夫 順子

喜久 蝶

原爆忌雲は静かに流れけり
金魚揺れほとりの黙の弛みけり

天主堂の白亜のマリア原爆忌
メレンゲの白掻き回す原爆忌

ひざまづく美しき折鶴原爆忌
水替へて金魚はなやぐ泳ぎぶり

金魚飼ふ納屋の吐息三味なり
落籍されし金魚の吐息三味なり

踊り子の赤きスカーフ金魚玉
スケボーの少女宙舞ふ原爆忌

一人居の華やぐものに金魚の朱
ガラス越し猫を挑発せる金魚

原爆忌ボトルの水をごくごとく

でん治 由紀子

翔太 延昭

溺るるやうに雀ひた飛ぶ初嵐
秋めくや犬が跳び付くフリスビー

田の中に新の墓あり初嵐
初嵐閻魔の目玉剥き出しに

山襲に秋めく色が出て来たり
珈琲の香をしみじみと秋めける

理恵 美佐尾

水尾 佐江

昔話あれこれ 8

神功皇后の神がかり

神託を疑い、命を落とした天皇

今度は第十四代仲哀天皇の時代お話。景行天皇の後を継いだ成務天皇に子がなく、倭建命の子が成務天皇の後を継ぎ、仲哀天皇となった。

仲哀天皇が、熊襲を撃とうとして、神託を得るため琴を弾き、建内宿禰は庭で神のお告げを待った。(古代の神事における弾琴は神を招き寄せるためである。)すると、仲哀天皇の後神功皇后は神がかりして、

「西の方に金銀をはじめ珍しい宝物が沢山ある国がある。その国を帰属させて授けよう」と言った。

天皇は、「高い所に登って西の方を見

てもそんな国は見えずただ大きな海があるだけだ」と言い、偽りを申す神だと思ひ、琴を弾こうとせず黙っていた。

その神はたいそう怒り、「この国はそなたの統治すべき国ではない。そなたは黄泉国へさつさと行きなさい」と言った。

建内宿禰は慌てて「恐れ多いことでございます。すぐにそのお琴をお引きなさいませ」と忠告した。天皇はしぶしぶ琴を取り上げて弾きはじめたが、間もなく琴の音が絶えた。灯を掲げて見ると天皇は既に事切れていた。

仲哀天皇は神罰による死であったので、その穢れを除くため、国を挙げての大祓をした。

胎内で国の統治を

定められた御子

大祓の儀式を済ませた後、建内宿禰は再び神託を乞う。神は西の国の話を繰り返し、これからこの国を治めるのは神功皇后の胎内にいる男御子だという。神は

底筒男・中筒男・上筒男の神(住吉大神)であり、天照大神の御心による神託だと言う。

神功皇后の新羅親征

神々の指示に従うと、軍船は海の大小の魚たちの背に乗り、順風に推されて新羅の国に到着した。新羅の国王は、服従を誓い、これ以後馬飼いとして仕え、百濟の国は航海を掌る役所と定めた。

(この伝説は、後に帝國主義時代に朝鮮侵略を正当化するため、日本軍に利用されてしまった。『地図とあらずじで読む古事記と日本書紀』より)

応神天皇の聖誕

新羅からの帰国途中、神功皇后は俄に産気づくが、石を腰に巻き付けて出産を遅らせ、筑紫に着いてから無事出産した。その地を名付けて「字美」という。

(つづく 丸山マスキ)

各地句会



水明松本句会 (松本)

夕暮れの紫陽花色を変へて咲く
 ビタミンC塗つても消えぬマスク焼け
 西瓜食べニッコリ顔の歯抜け孫
 切子硝子の器ひかるや星涼し

神戸大池句会 (神戸)

顎乗せて午睡の猫や日の盛
 今朝の秋オリンピックのセレモニー
 人目なくば子等の中にて水遊び
 雲集ふガラスのビルや晩夏光

若狭水明会 (若狭)

葛の花葉陰に彩を深めたり
 捨て舟に花葛まとふ仏谷
 夕暮れに腰抜かしけり婆案山子
 ワクチンとコロナのいくさ秋暑し

鶴川山百合句会 (町田)

密かなるダムへの古道葛の花
 また一軒空家になりて葛の花
 葛の花かつて牛舎のありし所
 新亡の絵灯籠しばし揺れうごく
 葛の花過ぎて棚田の見え隠れ
 新茶汲む懐かしりの香りかな
 葛の花まだ八十の力瘤

水明大阪俳句会 (守口)

保人 盛り塩の路地の店先残暑かな
 鼓 ころなし日影の伸びし残暑かな
 郁子 残暑見舞ひ二代目女将の左利き
 寛久 無沙汰詫び残暑見舞に浦和漬
 ことは 球児等の白き歯光る残暑かな
 祥子 生き生きとシニアゴルフや残暑かな
 想子 桔梗濃し風むらさきの門跡寺

水明大阪俳句会 (守口)

コロナ梅雨感染速報続きをり
 先客のざわめき漏れて夏座敷
 夏座敷虚子全集を枕とす
 夏座敷米寿の祝五つ紋
 ゆるやかに正座を崩す夏座敷
 親在りし頃のままなり夏座敷
 畳替へして大の字に夏座敷
 風見鶏まはる銅葺き夏館
 夏座敷占めて赤子の寝息かな
 床の間に怪しき石や夏座敷
 大の字に寝てみる故郷の夏座敷
 真白なる模型帆船夏座敷

青葉の会 (浦和)

早苗 秋の山父の墓石を洗ひけり
 礼子 突然に襖切り裂く稲光
 千津子 秋山のふもとの墓に花手向け
 玲子 稲びかり村の田畑が驚けり
 美千子 稲妻にかつと眼を剥く仁王像
 真白なる模型帆船夏座敷

樺の会 (浦和)

初花 秋暑しさつぱり系のレシビ線る
 和風 垣根越し桔梗一輪顔見ゆる
 白鷺 不機嫌な五臓六腑の秋暑かな
 冬至

水明大阪俳句会 (守口)

味噌の香に味蕾を醒ます今朝の秋
 窓開くればどどどばかりに蝉の声
 風鈴の音のついでくる夢の中
 新涼のこの世の風を頂けり
 寺涼し襖へだてに会二つ
 大西日ぎざつと後円墳を押す

青葉の会 (浦和)

美紗子 秋の山父の墓石を洗ひけり
 真理 突然に襖切り裂く稲光
 美智枝 秋山のふもとの墓に花手向け
 美子 稲びかり村の田畑が驚けり
 美智枝 稲妻にかつと眼を剥く仁王像

樺の会 (浦和)

初花 秋暑しさつぱり系のレシビ線る
 和風 垣根越し桔梗一輪顔見ゆる
 白鷺 不機嫌な五臓六腑の秋暑かな
 冬至

花衣の会 (浦和)

赤まんま指切りの子はきつと来る
赤まんま祖谷の吊橋ゆれゆれて
同窓と並んで聞くや祭笛
盆踊り風に提灯踊りだす

みよ
みち
峯雄
章嘉

コクーンシテイカルチャー俳句教室(さいたま新都心)

毛虫と会話登校拒否の女の子
箒木や尖りし心丸くなる
ガアガアと鴉が叫ぶ油照り
油照睡を濃くして畑仕事
夏痩せて鏡の奥に母が居る
医者嫌ひ坊主嫌ひぞ毛虫焼く
粘りつく演歌のこぶし油照
丑三つに歩く気配の葎草
葎木や母の遺愛の屋敷畑

延昭
俊晴
淑子
俱子
美枝子
正信
千恵子
早都子
昇

りんどう俳句会 (浦和)

朝顔や下町散歩向鳥
波音に松風騒ぐ晩夏の夜
朝顔の蔓に軒先明け渡す
一山が放牧地なり晩夏光
晩夏光渚に拾ふ忘れ貝
十代へ五輪託して去る晩夏
朝顔の縁の覚めたる俄雨

紀子
弘夫
卓郎
翔太
君夫
治子
徹雄

敗戦の熱き涙よ晩夏光
朝顔の団十郎も市の華

珈琲を濃い目に淹れし晩夏かな
病癒ゆ朝顔に水惜しみなく
ありがとうと亡き人の声季夏の風
朝顔の高さに躡る躡り口

新樹の会 (浦和)

秩父路の歴史に触るる秋遍路
西瓜買ふ八等分の一切れを
鋭敏な指の触覚衣被
手も触れず去りし初恋ソーダ水
吾が触角はいづこなるかな秋の蛇
触角の折れて鳴く虫進路なく

若鮎句会 (浦和)

断捨離の進まぬ手元花芙蓉
微睡みて客車銀河の中を往く
朝顔の絡むる蔓と家に居り
茎断ちてへちまの水や子規の待つ
湯治場の独りひとりの天の川
朝顔のつる直したり水を遣る
朝顔やあをあざやかに朝そめる
朝顔の替はるかはるに競ふ花
着信や銀河と話すごと話す
天の川ほとりに鳥や獣たち

正信
サヨ子

典子
寛治
利子
順子

たかな俳句会 (川口)

天の川さよならだけが言へなくて
おともなく朝顔咲くも色を断ち
夕映に歌ひつくして法師蟬
水際に白き風あり秋に入る
秋立てど秋の雲なし雨の街
肌撫づる風のふくらみ今日の秋
慈雨を待つ狭庭の草木今日の秋
父の忌の花や水やらつくつくし
閉校を惜しむ分校つくつくし
トリを取る役者に矜持つくつくし
一塔の暮るる山影法師蟬
今朝の秋香草ゆらし風来る

蝌蚪の会 (浦和)

さなえ
芳春
拓真
万美
みえ子
順
亮一
夕峰
稀香
月を

鶴城
喜夫

久美子
のり子
福美

勢津子

和子
義子
鶴城
水尾
静香

ひさの
礼子
宣子
朝香
信一
さち子
元美
るみ子
鶴城
月を

皇月の会 (浦和)

妙高の上まで晴れて赤まんま

ママごとの必需品なり赤まんま

母真似る半歩遅れの盆踊り

手に取れば思ひ出散りぬ赤まんま

土用入る閻魔も塩を舐むるほど

赤のまま今年も好きな野路の花

踊の輪離れ社に影ふたつ

アーチ雲より転がり出づる秋の雷

野ばらの会 (浦和)

一切れは考一切れは妣へ梨を剥く

喰へぬ詩のノート手にして秋灯下

歳時記に亡き人の文字秋燈下

ラ・フランス豊かな腰の裸婦に似て

終戦のあの日と同じ秋灯

秋の灯や女将の手話の「ありがとう」

梨狩のすぐ挽ぎ取る子粘りし子

珊瑚の会 (浦和)

稲妻の関東平野ほしいまま

短命に徹し秋蟬声しほる

人の死のある日突然秋の蟬

秋蟬や古里いよよ遠くなり

稲妻や筑波女体につきささる

珪子

順子

紀子

静香

孝磨

久子

曆文

きいち

遠山をあぶり出したる稲光
手短かに話せと急かす稲光

秋の蟬年忌の経に和すごとし

稲妻に一撃さるる軸の先

秋蟬も声を納むる結願寺

稲光りバランス崩す弥次郎兵衛

ミモザの会 (横浜)

自転車のサドルに二匹赤蜻蛉

想ひ出を辿りて盆の月の中

三姉妹寄りて母の忌盆の月

盆の月ため息一つ又一つ

台風の去りて厨にカレーの香

もう一年まだ一年盆の月

裏山におすまし顔の盆の月

白髪の兄と見てゐる盆の月

和歌山水明句会 (和歌山)

爽籟に吹奏楽部音合はせ

両袖を帆にしバイクの盆の僧

腕のギプスに屈託なき児休暇果つ

カーポートの天井飛ぶや盆の時化

かなかなや「深川」の舞もう一度

竹伐るや竹とわたしの腕比べ

さあ今日も草と格闘秋暑し

免許証無傷で返し今年酒

かつ子

喜恵

マスマ

水尾

昇

節代

由美子

萬蝶

玲子

慶子

亜弥子

栄子

史代

千春

千

和子

道子

千枝子

千世子

満耶子

さわゑ

洋子

廸代

芽吹句会 (浦和)

雁渡し心の蝶子を締め直す

雁渡し銃の手入れに余念なし

盆用意未だに光る位牌文字

流木の穢れなき艶雁渡し

絵蠟燭ともし迎ふる盂蘭盆会

秋簾テレビ画面に先制点

雁渡し池塘を過る千切れ雲

円卓の会 (浦和)

新涼や炯眼戻る金剛像

底紅やスケートボード宙を舞ふ

稲穂垂る目頭熱き老農夫

底紅やひと日を仕舞ふ茶事の席

モノクロのレコード盤や秋微雨

新調のダレスバッグや涼新たな

盆狂言縫ひ目ほころぶ口合はせ

きざきサークル (浦和)

とて馬車の馬に塩やる残暑かな

銀河濃し戦火のありし国愁へ

ツアー客閤を登りて大銀河

天の川遺品の時計刻む夜

二十五年過ぎし乳腺秋暑かな

汽笛いま鉄橋渡る天の川

チアキ

千重子

富子

玲子

ひろこ

道

道

道

輝

翠

道

月

を

鶴

城

啓

子

俱

子

喜

代

子

かつ

子

和

枝

和

子

蘭の会 (浦和)

炎暑なり歩く人なし道白し
千日紅内に秘めたる恋ころ
内外に笑顔ふりまく百日紅
古民家や炎暑忘るる燻し土間
身の内を片付け涼風通りぬけ
病葉や一位の葉には骨がある
病葉や大人になれぬ奴ばかり
雫まで内裏に献ず氷室守

水明熊谷句会 (熊谷)

遠き日の戦ひ知らぬ鳳仙花
ほつほつと街に灯火が終戦日
鳳仙花はじける気迫子らに欲し
鳳仙花飛び散り何か急かるる日
姉になるつもりはなくて鳳仙花
敗戦忌ギブミーチョコに疵の怒り
草相撲勝負決めた太鼓腹
特攻の叔父を偲ぶや終戦忌

俳句の手ほどき (岩槻)

花白粉橋のたもとの別れ路
赤坂の辻の三味の音花白粉
浦和岸町白粉花の咲き初むる
夕化粧どなたが長女次女三女

粉雪 悦子 信一 孝男 月エ 鶴城 京子 和子 秀子 燈女 治江 栄子 徹平 正行 茂子

愛しさに触れて出入り白粉花
紅を増す白粉花に夕日影
母恋し白粉花の咲く小径
花街に残る昭和や夕化粧
休暇昆虫研のファーブルら
終ひにはペキパキボキと白粉花
花白粉留守番の子が鏡台に
米を研ぐ母の背丸く秋日落つ
刃物研ぐ工場の窓に赤蜻蛉
白粉花路地で豆腐屋小商ひ
おしろひを咲かせ端唄の師匠かな

山茶花 (浦和)

社家町を巡る清流さくら蓼
蓼の花娘まかせの八十路かな
初嵐いきなり傘を攫つてく
散歩する犬の貌にも初嵐
妙義より通り抜けゆく初嵐
初嵐熱戦ひろげるスパーアリーナ
城跡の小さな囲ひ蓼の花

雛の会 (浦和)

かなかなかな見知らぬ街に居る心地
鯛や里の日暮を早めたり
かなかなや茜の空を透きとをす
羅を光をまとうように着て

慶子 水尾 美佐尾 義子 徹平 忠男 翔太 幸代 美子 卓郎 かつ子

心奥を灯す光や盆供養
水陰草のさゆらぎ知るや天の川
柿の木塾 (浦和)
踊笠みんな見知らぬ人となり
輪踊の芯に茶髪の桴捌き
夕かなかな御簾越しに見る巫女の舞
廻り来し友に問せ踊の輪
鯛やうねりとなりて鳴く薄暮
岡惚れの踊子見つけ飛入す
盆踊り色香こぼるる指の先
鯛の声遠ざかる坂の道

マスミ 泰子 光子 美江子 清一 綾子

喜恵 燈女 輝翠 政代

チアキ 佐江 恵子 昇 かつ子 和葉 水尾 節代 俊晴 和子

俳壇 九月号

◎俳壇ニユースクリップ◎

◎令和三年水明全国大会

六月二十九日(火)、埼玉県・浦和コミユニティセンターにて開催。山本鬼之介



▲山本鬼之介主宰(左から5人目)と結社賞各賞受賞者のみなさん

主宰の挨拶の後、結社賞授賞式に移り、水明賞・季音賞・新珠賞の表彰、記念撮影が行われた。新季音同人及び新同人委嘱状授与、祝電の披露、大会兼題句の披露・表彰と続き、最後は恒例の主宰の拍手木による三本締めで閉会となった。

俳句四季 九月号

巻頭句 山本鬼之介

葉柳やそろそろ出番「お岩さま」

葉柳に神籤結べばスパイめく

葉柳やむかし銀座に点灯夫

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。希望者は、下記により作品を送って下さい。 主宰 山本鬼之介

[指導者] 網野月を

[作品] 5句 [受講料] 1,000円

[方法] ①用紙自由 ②住所・氏名・電話番号を明記 ③84円切手を同封 ④返信用封筒は不要 ⑤締切なしで随時受付

[送付先] 網野月を 電話 080-7580-0208

〒338-0012 さいたま市中央区大戸1-31-2

令和4年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。

新人登龍門の主旨をよく解されて多数のご応募をお待ちしています。

応募資格	季音同人を除く同人・誌友
応募句	未発表作品：15句
締切	令和4年2月末日（発行所必着）
応募方法	水明12月号に応募用紙添付

特集 俳句で巡る日本の世界文化遺産

特別企画 俳句における比喩の力

巻頭作品10句

藺草慶子・井上康明・柏原眠雨
柴田佐知子・鈴木貞雄・星野恒彦
正木ゆう子・山元志津香

俳壇

11月号

10月14日発売
定価900円（税込）

巻頭エッセイ
関悦史

八木健造 滑稽俳壇

連載

ものがたりのある俳句……………青木亮人
先人のことば……………中西夕紀
いきもの歳時記……………角谷昌子
俳句史を見直す……………秋尾敏
難解俳句を齧る……………栗林浩
小説・遙かなるマルキーズ諸島……………マフソン青眼

俳句と随想12か月

菅野孝夫・柴田多鶴子

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

第5回「水明塾」のご案内

今年度はリニューアルしての水明塾となります。午前の部は全句講評講座、午後の部は神野紗希講師をお招きしての講演会になります。コロナ感染症対策のため、参加者数の制限がございます、早めにお申し込み下さい。

◆午前の部

・雑詠欄「水明集」投句者と未だ投句のない誌友対象(先着 35 名)

[日 時] 2021 年 10 月 29 日(金) 09:00 ~ 12:30

[会 場] 浦和駅東口パルコ 10 階第 13 集会室

[参加費] 1000 円

[参加申込] 参加費に当季雑詠 2 句を添えて、10 月 18 日(月)必着にて発行所・総務部あてに巻末添付の申込書で申し込んでください

[内 容] 主宰講話、全句講評講座(講師:網野月を)、

※当季雑詠 2 句は、巻末添付の申込書にご記入ください

◆午後の部

・水明全誌友・同人・季音同人対象(先着 65 名)

[日 時] 2021 年 10 月 29 日(金) 13:00 受付

13:30 ~ 16:00

[会 場] 浦和駅東口パルコ 9 階第 15 集会室

[参加費] 2000 円

[参加申込] 参加費を添えて、10 月 18 日(月)必着にて発行所・総務部あてに巻末添付の申込書で申し込んでください

[講 師] 講師:神野紗希(現代俳句協会副幹事長)

[演 題] 「俳句における鑑賞とは(仮題)」

講演後の質疑応答など

※会場はコロナ感染症対策のため申し込み無しの方の入場は出来ません

※なお、状況に拠っては、内容を変更する場合がございます

事業部

「菊風句会」のご案内

本年度は7月に予定しておりました「夏行」の代替えとして「菊風句会」を開催いたします。当日出題の席題句会です。奮ってご参加ください。

- [日時] 2021年11月29日(月)・30日(火)午後12時00分受付
[会場] 浦和駅東口 パルコ9階第15集会室
[投句締切] 13:00
[会費] 1,000円/1日・2,000円/2日(飲み物は各自で持参してください)
[申し込み] 11月15日(月)必着にて会費を添えて発行所総務部へお申し込みください(先着65名)

- ※申し込みは11月1日より受け付けます
※どちらかの日程で出席の方は「29日」または「30日」と日付を明記してください
※会場はコロナ感染症対策のため申し込み無しの方の入場は出来ません
※なお、状況に拠っては、内容を変更する場合がございます
事業部

付録 季寄せを兼ねた俳句手帖 冬・新年

※内容は変更になる場合があります。

特集

二十四節気&七十二候で詠む/忌日で詠む/六曜で詠む
/月の満ち欠けで詠む/祭事で詠む

暦を詠みつくす

受賞作「優しき腹」50句……岡田由季
受賞のことは/選考座談会/候補作品15篇
選考委員 仁平勝・正木ゆう子・小澤實・岸本尚毅

第67回
角川俳句賞
発表!

特別作品 一字多喜代子・茨木和生・西山睦

俳句

11月号
予告

10月25日発売
予価1,040円(本体945円)®

電子版同時発売! 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

風 声

○俳句四季八月号——「季語を詠む」欄

江戸といふ時代へ還る鳥兜

鬼之介

○現代俳句八月号——「現代俳句の風」欄

初歩き初の躩き梅雨の明

青木鶴城

一本を決めて素足の女子剣士

大塚茂子

短夜の明日の頁にしをり置く

神田治江

小走りで合はず歩調よ夏帽子

越田栄子

横断の拳手真つ直ぐに風薫る

宮崎紫水

○くぢら（中尾公彦主宰）八月号——「受贈俳誌美術館」欄

葉柳やむかし銀座に点灯夫

鬼之介

○草笛（太田土男主宰）八月号——「受贈誌一詠」欄

チエロを負ふ少女五月の森の径

鬼之介

○好日（高橋健文主宰）八月号——「受贈誌御礼」欄

地毛で結ふつぶし島田よ三社祭

鬼之介

○新月（松田碧霞主宰）八月号——「受贈俳誌紹介」欄

国道に優る村道みどりの日

鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）八月号——「諸家近詠」欄

チエロを負ふ少女五月の森の径

鬼之介

○笏（山本一步主宰）八月号——「受贈誌の一句」欄

かつて此処に「銀巴里」ありき花曇

染谷正信

（日高道を抄出）

水明発展基金御礼

（敬称略）

—令和三年八月三十一日現在—

落合和枝	2	口	山本鬼之介	50	口
森本早苗	10	口	石山かつ子	10	口
高橋綾野	2	口			
仲田利子	3	口	合計	77	口

謹 弔

服部みどり様（季音同人九十二歳）は九月十三日逝去されました。

戒名 明華院仁徳翠諧大姉

謹んで哀悼申し上げます。

誤植訂正

九月号に誤植がありました。お詫びして訂正いたします。

○二十頁下段十三行目

正 松宮保人

誤 松保保人

訂 正

左記の様に訂正して下さい。

○八三頁下段八行目

正 羅や薄暮の野外映画会

誤 羅や薄暮の野外映画界

奈良は秋、奈良は柿

秋谷信一

「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」十代で知った句だが、柿を食べることで鐘が鳴るなんておかしいと、当時は思っただけだった。

二十五年程前、新緑の頃、犬養孝著「万葉の旅」を手に奈良を旅行した。その一日、天理から三輪まで山の辺の道を歩いた。途中、人麻呂歌碑辺りから降り出した雨は、三輪山の近くになると本降りになった。椋原神社前で茶店を見つけたので駆け込んだ。体が冷え切っていた。温かい食べ物はないかと、店の爺さんに尋ねると、にゅうめんを奨められた。出されたにゅうめんは、澄んだつゆで、薄味で、具も入っておらず、頼りなかったものの、一気に食べた。体が温まり一息をつくことができた。土産物を物色し始めると、爺さんから「奈良は、秋がいい」と声がかかった。何故かと聞き返すと、店先の庭を指さしながら「奈良の秋は、柿がいい。(地方の)みんなに送ってやる」爺さんの返事だった。なんで柿が良いのか、得心できなかったものの、爺さんの言葉「奈良は秋、奈良は柿」が頭に残った。

それから五年程たった紅葉の頃、御所駅から高鴨神社先の

風の森まで葛城古道を歩いた。一言主神社に近く、くすんだ土塀に続いて小ぶりの門があった。門前に無人販売の柿が置いてあった。買い求めようと門前に立ち止まった途端、家の中から小柄な婆さんが出てきた。長年農作業に携わって日焼けが定着したのだろう。黒味がかかった顔の婆さんから、試食を奨められた。剥いてくれた柿を口にすると、深い甘味、硬くもなく柔らかくもない口当たり。おいしい富有柿だった。

「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」を知ってから六十年程経った今、その十七音には変わりがないものの、「柿」と「法隆寺」の四文字から、奈良の、斑鳩の、秋の田園や五重塔の景が浮かぶと共に、加えて「鐘が鳴るなり」から、しみじみとした秋を迎えているという情感・季節感が伝わってきます。そして十七音全体から、柿を食べる、柿が食べられる、その喜びの気持ちも伝わってきます。加えて葛城の媼手もぎの富有柿が浮かんできます。

水明発展基金募集のお願い

○一口千円 何口でも何回でも何時でも。

○振込口座番号 00130-5145024

○領収証は発行せず、その都度「水明」誌上に掲載してお礼に代えます。

水明俳句会・水明発展基金

後記

今年は俳句に限らず、多くのイ

ベントが中止となる中、水明では「春の吟行会」「全国大会」に次いで去る九月二十三日に「かな女忌」を修する事が出来ました。今年中に「水明塾」と「菊風」の二つの会を予定しています。その「水

明塾」の申し込みは、本号巻末の用紙を用いて、お申し込み下さい。

七月号でご応募頂いた「夏季競詠」は、今月号にて発表されました。水明集の方、季音の方を問わず、殆どの水明人が応募されたようです。同じ兼題で、こんなに多くの俳句を作っても、同じ句が無いのに、改めて感動しました。

また、今年の夏季競詠の兼題は「夏野」「炎天」「見」の三題でした。詠み込みの文字は季語では使わ無いのが、水明では約束事になって

います。しかし、新しい方はその決まりをご存知ないので「見」を季語（例えば月見、月見草等）で使われた方がいたら、主宰よりご指摘がありました。案内不足で失礼致しました。

後記の下端に「今月のはてな」欄を一月から設けました。編集作業の折、各自が？の字を出し合い、それを丸山マヌミさんに纏めて頂き、下段の表にしています。

ところで、夏季競詠の四四頁の藤澤喜久様のお句

炎天の日時計正午の暑針指す
の「暑針」がネットでも漢和辞典でも分らず、思い余ってお電話をして「きしん」と教えて頂きました。

すると広辞苑で一発でわかりました。ありがとうございました。これからも、困りはてて作句者へお電話でご教示を仰ぐ場合があると思います。その折にはよろしくお願い致します。

（節代）

今月のはてな？

鏤（ちりば）める

潤（ほと）ぶる

抄（はかど）る

常侍（じょうじ）

拉（ひし）ぐ

塹（たがね）

暑針（きしん）

蜚蠊（こきぶり）

鏝（つば）

木歩（もっば）

「富田木歩」のこと

水明発行所受付時間

曜日：（月・水・金）

時間：午後1時～午後5時
（火・木・土・日・祭日は休み）

水明の行事と重なった時は休み

（上記の時間には係がおりますので、
ご用の方は 時間内にお願ひします。）

79 56 55 44 41 11 38 31 21 7 頁

水明

令和三年十月号
通巻一〇九三号

令和三年十月一日発行

発行人

山本 鬼之介

〒330-0073

さいたま市浦和区元町一丁目一七八

電話

048-886-1600三

発行所

水明俳句会

〒330-0064

さいたま市浦和区摩訶町一丁目二二

電話

048-822-4741

誌代

半年分 六、〇〇〇円

同人費（誌代を含む）

一年分 一二、〇〇〇円

季音同人費（誌代を含む）

一年分 二四、〇〇〇円

振替

一年分 三〇、〇〇〇円

印刷所

中央美版

振替

〇〇一七〇〇〇一五三三九三

季音抄

山本鬼之介

一塔の暮るる山影法師蟬
丁度良き二人の歩調秋の虹
桔梗濃し風むらさきの門跡寺
ラ・フランス泪の形にグレコ逝く
突如止む蝸に開くあの世の鍵
吾が庭の朝日隠れの秋めけり
読経の中へ中へと鉦叩
山里に闇のさざ波星祭
火櫛のただならぬ赤原爆忌
夕顔の闇ふかみゆく軒端かな
浦和岸町白粉花の咲き初むる
敗残の兵たり炎熱の競歩
休暇明昆虫研のファーブルら
絵蠟燭の焰ゆたかに迎へ盆
仏壇に水なみなみと終戦日
絵硝子の青き色射す夏館
ピオトープ蓮華に先祖帰り来て
頭数やうやう揃ひ初尾花

矢作水尾
山中みどり
柚木治子
由良ゆら女
吉住光弥
網野月を
井上燈女
丸山マスミ
大場順子
森川義子
梅澤佐江
渡辺舍人
近藤徹平
井上玲子
大塚茂子
福田千春
田中章嘉
正木萬蝶

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由
枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

夏季競詠抄

山本鬼之介

見覚えの姿涼しき遠会積
 炎天や読書と決めし日の奢り
 娶らずに羊追ふ杖夕青野
 撫で付けるコールマン髭炎天下
 炎天に曝す我が身やレクイエム
 炎天下水禍の土砂を掻く媼
 村の子のでんぐり返し大夏野
 見解の相違一息シャーベツト
 脱サラや炎天のなか名刺置く
 全身を見透かされさう紹のわたし
 いきいきと牛の反芻夏野原
 炎天下鞆かむこの息で女坂
 夏野原出土の美女は無国籍
 金盞ほどの夕陽や夏野原
 はてしなき旅のはじまる夏野かな
 火の鳥の羽音空耳炎天下
 品格を忘るる女神炎天下
 夏野原まつ直ぐ歩くむつかしさ

大場順子
 大塚茂子
 大橋勉代
 染谷正信
 網野月を
 横山君夫
 日高道を
 森本早苗
 新曆文
 矢作水尾
 石山かつ子
 石井喜恵
 大村節代
 原田秀子
 永野史代
 正木萬蝶
 野田静香
 椎野美代子

水明例会案内	句会名	日時	会場	指導者	幹事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山田みどり 太田絹映
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五曲明昇 淵徹雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化センター	大橋勉代	森本早苗